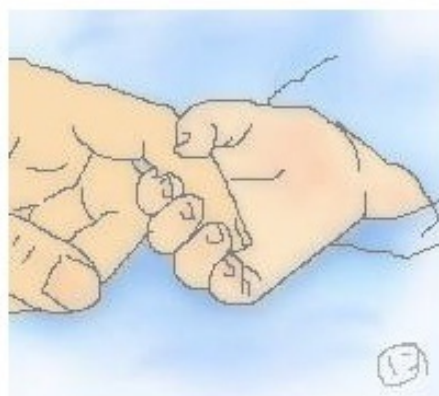


Blanket



神原 涼

Blanket - パパが死んで・・・

ナニモミタクナイ... ナニモカンジタクナイ... ナニモ...

「真理子さん」

ナニモ...

「真理子さん、聞いてますか？」

エ...

顔をあげると... 見知らぬ人が... ううん... 知らない人じゃない...

パパの会社の弁護士さん... さっき紹介されて... それから...

「そういうことですから、この家も土地も抵当に入っております」

一生懸命聞こうとするけど... 言葉が頭の中を流れすぎていくだけで...

「一週間以内には引き渡しということになりますから」

だって...

「こんなときに大変だとは思いますが」

パパが...

「真理子さんはいちおうここを出て一時的に児童相談所に」

「え...」

「まあ、そこも一時預かりということなので、あとは児童相談所の職員と相談していただくということで...」

「あの... 私... ここにはいられないんですか？」

「ええ、ですから、さっきから申し上げているようにここは抵当に入っております」

「それじゃ... 私... どこに...」

弁護士さんがゆっくりと息を吐いて、困ったように私の顔を見た。

「わかりますよ、急なことですからね、でも、しかたないんですよ」

ナニガ... シカタナイッテ... ドウイウ... ウウン... ワカッテル...

「お父さまの会社が不渡りを出してしまったんですから。

幸い、今回の... お父さまの保険金と遺産で借金はなんとかかなりましたが、
この家にはもうお住みにはなれないんですよ」

だって... パパが...

「うっ...」

私は口を押さえてトイレに駆け込んだ。

吐いても吐いても何も出てこない... けど... 吐き気が止まらなくて...

あの日から... パパが... 死んだ...

「お嬢さま、大丈夫ですか？」

お手伝いの佐島さんが駆けつけてきて、

「まあまあ、かわいそうにねえ」

そう言いながら私の背中をさすってくれた。

「急でしたものねえ、旦那さまが... グズッ... まさかねえ」

私は便器に顔を突っ込んだまま吐いて吐いて... 涙と鼻水しか出なくて...

「ごめんくださ〜い」

「あら、お客さまだ、お嬢さま、大丈夫ですか？ ちょっと出てきますからね」

佐島さんはそう言ってバタバタと玄関の方に走っていった。

パパが死んだ。

パパの車にトラックが突っ込んできて... 即死...

学校に連絡がきて... 信じられなくて... 家に戻ったら... みんながいて...

パパはまだ検死から戻ってないって... 人がいっぱいいて...

佐島さんは泣いていた... 会社の人たちがいっぱいいて...

あの人も... パパの奥さんも泣いていて...

でも、私は泣けなかった... 涙が出てこない... あの日から...

ナニモカンジタクナイ...

吐き気だけがして...

パパの死に顔を見ても... 信じられなくて...

葬儀が終わって、パパの奥さんが出ていったことを知っても...

なんとも思わなかった... どうでもよかった...

「なんだろうねえ、自分の旦那が死んだっていうのに、さっさと出て行って！

金の切れ目が縁の切れ目っていうけど、薄情なもんだねえ」

佐島さんはそう言って怒ってたけど、私はどうでもよかった。

あの人をママだと思ったことなんてなかったもの。

中学2年のときにあの人が家に入ってから、ずっと...

大手企業の社長の娘で、気位の高い人だった。

私の世話は全部佐島さんにまかせて、いつも華やかな場所に出かけていた。

一度だけ、そう、あの人が来て最初の頃、「ママ」って呼んでみた。

「やめてちょうだい！」

あの人は顔をしかめて言った。

「私はあなたのお父さまと結婚したけれど、あなたの母親になったわけじゃないのよ、二度とママなんて呼ばないでちょうだい」

あれ以来私はあの人を「蓉子さん」と呼ぶようになった。

パパは、「どうした？ ママって呼んであげないのか？」って言ったけど、

蓉さんは、「あなた、いいのよ、真理子ちゃんに無理させないであげて」
なによ、それじゃまるで私が反抗してるみたいじゃない！

そう思ったけど、何も言わなかった。

私もあの人をママなんて呼びたくなかったから。

吐き気が少しおさまって、私はトイレットペーパーで涙と鼻水を拭いた。

佐島さんがバタバタと走ってきた。

「お嬢さま、ちょっと来てくださいな」

私は佐島さんの後をついてリビングに戻った。

私が入っていくと、弁護士さんの向かい側に座っていた男の人が立ち上がった。

黒い背広...黒いネクタイ...

背が高い... 誰... 見たことない...

「真理子さん、この方は...」

「真理子ちゃんかあ！」

その男の人はニッコリして言った。

「やっぱかあちゃんに似てんなあ」

ハ？

「真理子さん、実はですね」

弁護士さんが戸惑ったような顔で言った。

「この方は、真理子さんの実のお母さまの... 再婚なさった相手の息子さんで」

「伸男つつうんだ、みんなはノブつつうけど、にいちゃんでもいいかな」

な... なに言ってるの... この人... 実のお母さまのって...

「真理子さんを...」

弁護士さんは戸惑った顔のまま、その男の人をチラッと見て...

「引き取りたいとおっしゃるんですよ」

「えっ？」

「だってよ、今聞いたら、真理子ちゃん行くところねえつつうじゃん、

あれだろ？ 児相行くんだろ？ ダ〜メだって、あすこは行かねえ方がいいぞ」

「あの...」

私はわけがわからなくて不安になって弁護士さんの顔を見た。

「あすこはよ、悪りいのもいんだぞ？ やめとけて、な」

男の人は一人でしゃべってた。

「それによ、俺、かあちゃんに頼まれてたんだ」

かあちゃん...って... 私の...

「もしも何かあったら真理子のこと守ってやってくれって」

私の... 本当のおかあさん...？

私の本当の母親は、私がまだ赤ちゃんのときにおばあさまに追い出されたって以前佐島さんが話してくれた。

佐島さんは私が生まれる前からこの家で働いていて、
パパが教えてくれないこともこっそりと教えてくれた。

「家柄が違いすぎるってね、そりゃあもうひどい仕打ちをされてたんですよ」

その話を聞いたのは、ちょうどパパがあのお奥さんと結婚した頃。

「確かにねえ、前の奥さまは早くにご両親亡くされて施設で育って中卒でね、

でもねえ、とっても優しい方だったんですよ、私ら使用人にもよくしてくださって」
佐島さんはそう言ってグズッと鼻をすすった。

「旦那さまが子会社の工場で働いてるのを見そめて、どうしても結婚するって、
ゆるしてくれないなら家を出るとまで言ったんですから、大旦那さまも大奥さまも
そのときは渋々ゆるしたんですけどねえ、お嬢さまが生まれて、
旦那さまがアメリカに仕事で一ヵ月ほど行きなさってね、
そのときに無理やり追い出したんですよ、それはひどいもんでしたよ、ええ、
奥さまはね、お嬢さまを連れていこうとしたんですよ」

「え？」

「なのに、大旦那さまが、『その子は香山の子だから置いていけ』って、
まあまあそれはもう修羅場でしたよ」

「ママは... 私と一緒に連れていこうとしたの？」

「そうですよ、とっても可愛がってらしたんですもの、なのにねえ、かわいそうに...」

「どうして無理やりでも連れていってくれなかったのかなあ」

「大旦那さまがね、『おまえのような学歴も金もないやつが育ててしあわせに
なれると思うのか！』って、おっしゃってね、それに、もし連れていったら
誘拐されたって警察に通報するとまで言ったんですよ、まったくねえ」

「ひどい...」

「まあ、でもね、女が一人で子ども抱えて生活するのは大変だものねえ、
それに、お嬢さまはここでお育ちになったから、こうしてしあわせに暮らして
いるんですから、まあ、これでよかったのかもしれないよ」

そうなのかな... これでよかったのかな... パパは優しいけど、仕事で忙しくて
ほとんど家にいないし、あのパパの奥さんは好きになれないし...
私は顔も憶えていないママのことを考えた。

今どこにいるんだろう？

何をしているんだろう？

私のことを憶えているのかな？

私のことを考えてくれるときがあるのかな？

「真理子さん？」

弁護士さんの声でハッと我に返った。

「どうしますか？」

な... なに... どうするって... なにを...

「確かに前の奥さまの義理の息子さんですが」
弁護士さんがまたチラッとあの男の人を見て、
「真理子さんとは血はつながっていないわけで...」
「血なんて関係ねえって！」

男の人がグイッと私のそばに寄ってきた。

「俺とかあちゃんも血いつながってなかったけどよ、ちゃんと親子してたんだからよ、
かあちゃんの娘なら、俺の妹ってことじゃん、なあ？」

そう言ってニッコリするけど...

私は...

「あの... なんだか... どうしていいのか... 急に... そんなこと...」

「そっか、だよなあ、ビックリしちゃうよなあ」

その男の人はそう言いながら笑った。

「でもよ、俺は真理子ちゃんの面倒みようと思ってっからよ、考えといってくれよ」

「え...」

「俺の電話番号とか、さっきその弁護士さんに渡しといたからな、

決まったら連絡くれよ、速攻で迎えに来るからよ、な」

そう言ってニッコリ微笑むと、その男の人は部屋から出ていった。

どうしたらいいの？

ドウシタライノカワカラナイ...

あの後、弁護士さんがあの男の人が持ってきたっていろいろな書類を見せてくれた。

「確かに美里さんの、真理子さんの実のお母さまの義理の息子だというのは間違いありませんね」

弁護士さんはあの男の人の戸籍を見ながらそう言った。

チラッと見ると、「美里」という名前にバツテンがしてある。

「これは... どういう意味ですか？」

「お亡くなりになったということです」

「え？」

「これを見ると... 三年前に亡くなっていらっしゃいますね」

私の本当のママはもう死んでる...

「あらあ！ 懐かしい！」

横から佐島さんが手を伸ばして一枚の古ぼけた写真を手に取った。

「お嬢さま、ほら、美里奥さまとお嬢さまですよ」

「え？」

その写真は色に変色してボロボロになってたけど、

赤ちゃんを抱いてにっこり笑っている綺麗な女の人が写っていた。

「まあまあ、お嬢さま、そっくりですねえ」

私に似てる？ ううん、私が似てるの？ この女の人に... 本当のママに...

そういえば、あの男の人も言ってた...

『やっぱかあちゃんに似てんなあ』

あの男の人は... 私の本当のママを知ってるんだ... 私より...

「どうしますか？」

弁護士さんが私の顔を覗き込んでいた。

「え？」

「彼は中原伸男、22歳、機械の部品工場で働いているそうです」

弁護士さんはパラパラと書類をめくりながら言った。

「今... 決めなきゃダメですか...」

「いや、ただ一週間後にはここを出なくてははいけないですから、
そんなに時間的余裕はないことは確かです、児童相談所の手続きもありますし」

ドコニモイクトコロガナイ... ドコモシラナイトコロバカリ...

パパが死んで、会社が倒産したと知ると親戚はみんな去っていった。
お通夜にすら来なかった親戚もいた。
パパが生きてた頃は、会社が倒産する前は、みんなよくここに来てたのに...。

お葬式の時、パパの悪口を言ってる人もいた。
「旧家のボンボンが会社なんか興すからこうなるんだ」
「何年も前から危なかったそうじゃないか」
知らなかった... そうだったの？
「大手企業の社長の娘と結婚したって、どうにもならなかったんだからな」
「どっちもどっちだけどな、こっちは金、向こうは旧家の名前が欲しかったんだろ」

ナニモカンガエタクナイ... ナニモ...

誰も私を引き取ってくれる人はいなかった。
財産も何もない私を引き取ろうなんて思うわけがないけど....。

高校三年になったばかりなのに...
来年の春は受験で、大学も決めていたのに...
学校... やめなきゃダメかな... あたりまえだよな...
でも... どうしたらいいの？ やめて働くの？ 何をして？

「ウッ...」

また吐き気がして、私はトイレに走った。

胃液しか出てこない... ずっと食欲がなくて...
怖い... これからどうしたらいいのか... どうなるのか... わからなくて...

ナニモカンガタクナイ... ナニモ...

お風呂からあがって、自分の部屋に戻った。
もう少しでここは私の部屋じゃなくなる...
そんなことを考えたこともなかった。
この家で生まれて育って、ここからこんなふうに出ていけなくちゃいけないなんて...

ドコニ？

児童相談所...
どんなところなんだろう... 想像もつかない...
そこだって、いられるのは一ヵ月だけ。
その後は？ 私はどこに行けばいいの？

机の上に...
弁護士さんが置いていった、あの男の人が持ってきた写真と書類...
写真... シアワセそうに微笑んで赤ちゃんを見ている若い女の人...
実感がわからない... この赤ちゃんが私で、この人が私の本当のママなんて...
あの男の人は知ってるのよね。
ママのことを... ママと一緒に暮らしてた... 私のママと...
私の本当のママはどんな人だったの？
ここを出てから、どこで何をしていたの？

『もしも何かあったら真理子のこと守ってやってくれって』

ママがそう言ったの？ 本当に？ 私のことを忘れてはいなかったの？

聞いてみたい... あの人に... ママのこと... 聞きたい...

あの男の人のところで暮らすなんて、そんなことを考えられないけど、
ママのことは聞いてみたい。
今は... なんでもいい... いろんなことがありすぎて... 疲れたから...
ママの話を聞いたら、もしかしたら、少しは気持ちが楽になるかもしれない...

電話... してみようかな...
今... 10時... こんな時間に電話したら失礼かな...
でも... ちょっとだけ... ママのこと聞かせてもらっただけ...

5回鳴らして出なかったすぐに切ろう。

書類の中にあった小さいメモ。

手書きの電話番号... 汚い字... いいけど...

これって携帯だよな、この番号。

なんだかドキドキする...

電源切っててくれたらいいな...なんて矛盾してるな、私。

番号をひとつずつ間違えないようにゆっくりと押して...

プップップッ... 電波を探してる音がして...

プルル...

あっ！ かかっちゃった！

一回... プルル... 2回... プルル... 3回... 切っちゃおうかな...

「あいつ」

あっ... 出...出た...！

「もしも〜し？」

「あ... あの... 香山です」

「あ？」

「香山... 真理子です」

「あっ！ おう！ 真理子ちゃん！」

驚いたような、嬉しそうな声が受話器から聞こえた。

「あ... あの... すみません、こんな遅くに...」

「ぜ〜んぜん遅くねえよ！ まだビンビンに起きてたからよ、ハハハ」

「あ... あの...」

「俺んところに来るんだろ？」

「え... あの... いえ...」

「俺はもうそのつもりで準備してっからよ」

「え？ あ... そ...そうじゃなくて、あの、ママの... 母のことを...」

「ン？ かあちゃんのこと？」

「ええ、あの、聞かせていただきたいくて...」

「おう、いいよ！ 俺んところ来たらいろんな話してやっからよ」

「い、いえ、あの、今...」

「今？」

「は... はい」

「いいけどよ、それよか会わねえか？」

「え？」

「俺は今からでもいいけどよ、真理子ちゃん、まだ高校生だもんな」

「あ... は... はい...」

「んじゃよ、明日！ 明日5時には仕事終わっからよ、その後会おうや」

「え... はあ...」

「どっかがいいかなあ、真理子ちゃんチの近くがいいよな」

「え... はあ...」

「あ、真理子ちゃん家から大通り出て、ずーっと真っ直ぐ行くとファミレスあんじゃん」
そこって... たしかバス停3つくらい先だったと思うけど...

「そこに6時でいいか？」

「え... あ... は、はい」

「おっし！ キマリな！」

会うことになっちゃった...

「サンキューな」

「え？」

「俺、真理子ちゃんから連絡来んの待ってたんだ、すんげえ嬉しいよ」

「あ... そ... そうですか...」

「んじゃ、明日な！」

「は、はい」

ピッ

ちょっとだけ... ママの話を聞くつもりだったのに... 明日あの男の人と会うなんて...

なんだか向こうのペースに巻き込まれて、はい...なんて言っちゃった。

でも...

パパが死んでから、ずっと家の中にだけいたし、それに...

ううん、なんでもない、寝よう。

灯を消して... 真っ暗な部屋の中...

パパが死んでからぐっすり寝たことなんてないけど...

ファミレスなんて入ったことなかった。

友だちとは、学校の近くのコーヒーショップとか、ちょっとオシャレな店に行くから。

うちの学校の生徒はみんなわりと裕福な家の子たち。

私もそうだった... パパが死ぬまでは...

5時50分。

10分も早く着いちゃった。

タクシーできたらすぐだったんだもん。

「いらっしやいませ～！ 何名さまですか？」

って、聞かれたけど、

「あ、いえ、待ち合わせしているので」

って、入り口のそばのベンチに座った。

こんなゴチャゴチャした広い店内に入っちゃったら、どこにいるのかわからなくなりそうで。

なんだかドキドキしてきた。

ただ電話でママのことを聞くだけのつもりだったのに、会うことになるなんて...

やだな... 帰ろうかな... だって、ママのこと聞いたってどうなるわけでもない...

ママはもういないんだから...

やっぱり帰ろう！

立ち上がってドアを開けた途端、ドンッと人にぶつかった。

「す、すみません」

「あっ、真理子ちゃ～ん！」

え？

あの男の人がニッコリ笑って私を見てる。

あ... 顔に汚れがついてる...

「早かったんだなあ、えっと、おう！ 6時ジャスト！」

そう言って笑うけど...

「あ、あの... 私... やっぱり...」

「すいませ～ん！ 二人！」

そう言いながら私の手を引っ張って中に入っていっちゃった。

ど... どうしよう... 帰りたいのに...

二人用の席に案内されて向かい合って座った。

チラッと上目遣いで見ると、やっぱり顔に汚れがついてる...

言ってあげた方がいいのかな... でも...

「ん〜っと、俺はカレーライス大盛りとコーヒー、真理子ちゃんは？」

「え... あ... レ、レモンティーをお願いします」

「メシは？」

「い、いえ、いいです」

「腹へってねえのか？」

「は、はい」

食欲なんてない... パパが死んでからだけど... 今はもっとない...

「食ってきたんか？」

「え？ あ... は、はい」

そういうことにしておこう。

「なんだあ、一緒にメシ食おうと思ってたんだけどなあ、ま、いっか」

そう言ってニッコリする顔の汚れが気になっちゃって。

「煙草吸っていいか？」

「え？ あ、は、はい」

ちょっとお尻をあげてジーパンの後ろポケットからクシャクシャになった煙草を取り出した。

何を言えばいいんだろう... 何から聞けば...

そう思いながら、目の前の彼のTシャツに目をやった。

煤けたようなしらっやけたような青いTシャツ...

襟元と袖のところがヨレッとなって...

「真理子ちゃん」

「え？ あ、は、はい？」

「おとなしいんだなあ」

「あ... い、いえ、そ、そうでも...ないです」

「そっかあ？ あ、もしかしてキンチョーしてんのか？」

「え... あ... は... はい... すこ...し...」

「俺なんかにキンチョーすることねえって、アハハ」

気がついてないのかな... 顔に汚れがついてるって...

「真理子ちゃんの高校ってよ、あすこだろ？ 誠光学園」

「はい」

「すげえなあ！ あすこってよ、頭いいヤツばっかなんだろ」

「い、いえ、そんな...」

「真理子ちゃんも頭いいんだなあ」

「い、いえ、そんなこと... ないです...」

私は中くらいの成績で... でも... もう高校にも行けなくなる...

児童相談所に行ったら、誠光に通うなんてできない... 私立で、授業料だって...

「俺ん家からだとよ、バスで一本で行けっからよ、まあ時間はかかるけどな」

「え...」

「んで、いつ来る？」

「え？」

「引越しの準備があんなら、俺手伝ってもいいからよ」

「あ、あの、それは...」

「おっ、きたきた」

ウェイトレスが彼の前に大盛りのカレーライスとコーヒーを置いて、

私の前にレモンティーを置いた。

「以上でご注文の品はおそろいでしょうか？」

「ういっス」

「ありがとうございました」

彼はバクバク...っていうよりガツガツってカンジでカレーライスを食べ始めた。

「俺んところは... いつでも...いいぞ」

口いっぱいほおばりながらしゃべるから、こぼん粒が飛んだ。

「あ、いえ、あの」

あっ... この人の名前... わかんない... どうしよう...

「ン？」

「あの...」

“名前はなんていうんですか？”なんて今さら聞けない、どうしよう... でも...

「みよ... 苗字は...」

「あ？」

「い、いえ、あ... あの、苗字は... 母の旧姓なんですか？」

こ... これだ...！

「んにゃ、かあちゃんは山下だったろ、親父と結婚して変わったけどな」

「はあ...」

だから、なんていう苗字？

「一緒に暮らすんならよ、真理子ちゃんも俺とおんなし苗字になってもいいんだけどよ、
そうずっと、なんつったかな、あっ、あれだ、養子縁組つつうのしなくちゃなんねえんだっ
てよ。

そうになると、俺の子どもってことになっちまうから、そりゃヤベエよなあ、アハハ」
そんなこといいから、苗字を言って！

「俺はマジで明日からでもいいからよ」
あっという間にカレーライスを食べ終わって、今度はコーヒーをズズズッとすすった。
「あれだろ？ 弁護士さんが言ってたけどよ、あと一週間で出なきゃなんねえんだろ」
「はい...」

ナニモカンガエタクナイ... ナニモ...

このレモンティー... 出がらしみたいに薄くてまずい...

「んじゃ、今度の日曜に引越してことにすっか？」
「え？」

な、なに？ もうそんな話が進んでたっけ？

「日曜ならよ、俺も休みだからよ、工場の軽トラ借りてこれるしよ」
「あっ... いえ、あの、わ、私、ま、まだ、まだ、あなたの」
「にいちゃんでもいいって」
「そ、そうじゃなくて、昨日会ったばかりで、そんな」
「遠慮すんなって」
「え、遠慮とか、そういうのじゃなくて、あなたのこと、まだよく知らないし」
「昨日持ってた書類に書いてあんだろ」
「そ、そういうことじゃなくて... あの...」

私は児童相談所に行くから...
行きたいの？ 行きたくないけど... でも...

「どうして... 会ったばかりの私を引き取ろうと思うんですか？」
彼は... 私の顔をジッと見て、それから...
「俺の妹だもんよ」
そう言って微笑んだ。

私は... 胸の奥のずっとずっと奥の方が震えて...

それが怖くて... なんだか怖くて...

あわててバッグからハンカチを出して、彼の目の前に突き出した。

「顔... 汚れてます」

彼はポカンとして、それからニッコリ笑ってハンカチを受け取った。

引越し

「児童相談所には私から連絡しておきました」

弁護士さんはそう言うと、一枚の名刺を私の前に差し出した。

「これは担当者の方です、何かあったらいつでも相談してくださいとのことです」

「ありがとうございます」

「では、私はこれで失礼します、あとはここの引渡しの際に参りますので」

弁護士さんはそう言って席を立った。

弁護士さんが帰った後、空のティーカップを片付けたながら佐島さんが言った。

「お嬢さま、本当にいいんですか？」

「何が？」

「美里奥さまの義理の息子っていったって、赤の他人なんですよ」

「児童相談所だって... 他人ばかり... 知らない人しかいないもの」

「そりゃそうですけどねえ、こんなこと言っちゃなんですけど、男の人と二人暮らしなんて」

「義兄よ」

本当はそんな感覚なんかぜんぜんないのに...

どうして私はあの人のところへ行くななんて決めてしまったんだろう。

だって...

『俺の妹だもんよ』

あのときの胸の奥の震えはなんだったんだろう... 怖かった... 怖かったのに...

私はあの瞬間、あの人のところへ行こうって思ってしまった。

だって、だってどうせどこに行っても同じだもの。

私の家はなくなる... 帰る場所はなくなる...

児童相談所で知らない人たちと一緒にいるのも、あの人というのも同じだわ。

大勢の知らない人より一人だけの知らない人の方がまだマシだもの。

それに... あの人はママのことを知ってる... それだけでも... マシだわ。

明日、いよいよこの家を出る。

引越しの荷物はほとんど詰めた。

学校の制服と道具も。

あの人のところへ行っても高校に通えることがわかった。

「真理子ちゃんの学校行って調べたんだけどよ」

「え？」

「すんげえ高けえんだな、あの学校の授業料ってよ、そんでもな、俺、なんとかしようと思ってたんだけどよ、、真理子ちゃんの親父さん、一年分の授業料払ってたんだってよ」

それじゃ... 学校はやめなくてもいいの？

「あとの細けえ金はなんとかすっからよ、真理子ちゃんは何も心配しなくていいかな」

よかった... ホッとした...

学校をやめて働くなんて、まだ今の私には怖くてできない...

それに...

卒業するまで... そうよ、来年の春まで、この人のところにいるのは...

そう思うと少し気が楽になった。

「お嬢さま、よろしいですか」

佐島さんがそう言ってドアを開けた。

「あらまあ、もうすっかり片付いて」

佐島さんは目をウルウルさせて...

「とうとう明日なんですねえ」

そう言って鼻をグスッとすすりあげた。

「そうそう、これ、私の娘の家の電話番号と住所なんですよ」

そう言って私に一枚のメモを渡した。

「娘夫婦のところに厄介になることになりましてね、ちょっと遠いですけど、
落ち着いたら遊びにいらしてくださいねえ」

「ありがとう」

私はメモを受け取ってバッグの中に入れた。

「何かあったらいつでも電話してくださいね、何もしてさしあげられないですけど、
お嬢さまのことが心配で... グズッ」

「佐島さん、泣かないでよ」

「あらあら、すみません、私ったら、グズッ、でも、まさかこんなことになるなんてねえ」

「しかたないわよ」

そう... しかない... どうしようもできない...
ビデオみたいに巻き戻すことなんかできない...
パパがいた頃に... 何も考えずに暮らしていた頃に...
戻りたい... できることなら... でも...

ナニモカンガエクナイ... ナニモ... カンジタクナイ...

ダンボールの積んである殺風景になってしまった私の部屋。
最後の夜...
明日から... どんな生活が待っているんだろう...

カンガエタクナイ... ナニモ...

暗闇の中で無理やり目をつぶっても、眠れない...
ゆっくりと眠れるときは、もう二度と来ないのかもしれない...

朝8時にあの人が迎えに来た。

「よっ」

頭にタオル巻いて、引越し屋の人みたい。

私は結局明け方に少しだけトロトロただけで、まだ頭がボーッとしていて...

「あ... い、今、荷物持ってきます」

「俺、運ぶからよ、入っていいか？」

「ど、どうぞ」

汚いスニーカーを脱いで玄関にあがったあの人の靴下... 穴が開いてる...

そんなことどうでもいい... 荷物運ばなきゃ...

「マジ!? こんなにあんのか？」

あの人はダンボールの山を見て驚いた声を出した。

「俺んち、こんなに入んねえぞ」

「え？」

「どうすっかなあ」

これだって少なくしたのに... パーティー用の服とか靴は処分したし、それに...

「ぜってえ使うもんだけ部屋に入れてよ、あとは工場の倉庫に入れといてもらうかな」

ぜったい使うものって... えっと... 学校のものと... 普段用の服と... それから...

「あの... 机とベッドは...」

「いらねえよ」

「え？」

「布団はあるからよ、机はコタツテーブルがあるしょ」

そう言うと、ダンボールを二個重ねて軽々と持ち上げた。

そういえば... 私... この人の家ってまだ見たことなかった...

ボーッした頭でそんなことを考えながら、ダンボールを一個ズリズリひきずって廊下に出た。

サカイ工場...っていうかすれた文字が書いてある軽トラックに荷物を載せ終わって、私はふと自分の家を見上げた。

もう... 二度とここへは帰ってこれないんだ...

そう思うと急に悲しくなって... 心細くて... 不安で...

涙をいっぱいためて私を見ている佐島さんの手をにぎった。

「お嬢さま、お元気で」

うなずくのがせいっぱいで... 声を出したら泣いてしまいそうで...

「ばあちゃん、いつでも遊びにこいよな、俺んち狭めえけど泊まったっていいからよ」

「まあまあ、ありがとうございます、お嬢さまのこと、よろしく願ひいたします」

佐島さんはそう言って、あの人に向かって頭を下げた。

「心配しなくていいからよ、俺の妹だもんよ、俺がついてっからよ」

あの方はそう言ってニッコリ笑った。

ガソリンと煙草の匂いのする車の中。

安くさいビニールシートの助手席に座って、私は生まれ育った家を離れた。

あの人の部屋

あっ...

車が止まる軽い振動で気がついた。

やだ... 私、寝ちゃってた...！

チラッとあの人の方を見ると、

「着いたぞ」

ニッコリしてそう言った。

やだ、いつの間に寝てたんだろう...

最初はちゃんと起きてて、車の振動でお尻が痛くて... それから...

時計を見たら40分が経っていた。

家から40分...

車の窓から外を見ると、家のまわりとはぜんぜんちがう町並み...

古い小さな家がごちゃごちゃあって、庶民的...っていえば庶民的なんだけど...

あの人がドアを開けて車から降りたから、私もあわてて降りた。

「ここだよ」

あの人が指差したのは... ここ...？

それは... まだこんなアパートがあったの？ってというような古い木造のアパート。

古い...っていうか、ボロっちっていうか...

「こっちこっち」

あの人に言われるままに後ろをついていった。

薄暗い廊下... なんかヘンな匂いがする...

「ここが今日から真理子ちゃんの家だぞ」

そう言って笑いながら、ベニヤでできたようなドアにカギを差し込んでガチャッと開けた。

「入って待ってろよ、俺、荷物持ってくるからよ」

そう言って廊下を走っていくあの人の後姿を見て... そして...

靴を脱いで薄暗い部屋の中に入って...

壁も天井も煤けて、足元は擦り切れた畳、入り口の脇に小さな流しとガスコンロ...
窓が... ウソ... 木？ 今どきサッシじゃなくて木なの？
小さな部屋の真ん中に... これがあの人の言ってたコタツテーブル？
コタツなんて見たことなかった...

「座ってていいんだぞ」
ビクッとして振り向くと、あの人がダンボールを二個抱えて入ってきた。
「あ... わ、私も運びます」
「いいっていいって、疲れてんだろ、ゴロンとしててもいいんだぞ」
「いえ、あの、やっぱり荷物... 全部は入らないと思うので選んできます」
「そんじゃよ、真理子ちゃんがこれとこれつつってくれたら俺が運ぶからよ」
「は、はい」

本や靴やバッグののに入った箱はあきらめた。
身の回りのものだけ、学校のものや普段着る服や下着や洗面用具、あとは...
あとは... なんだか何も考えられなくて... 考えなきゃいけないのに...

カンガエタクナイ... ナニモ...

「真理子ちゃん、どした？」
声をかけられて... 車の前でボーッと立っていたことに気づいた。
考えなきゃいけないのに、どれを運ぶか、決めなきゃいけないのに、気持ちだけがあせって...

「ウッ...」
気持ち悪い...
吐きそう...

「どした？ 吐きてえのか？」
私は口を押さえたままうなずいた。
「おっし、便所こっちだ、ちょっとガマンしろよ」

あの人は私を抱えるようにして薄暗い廊下の突き当たりにある扉を開けた。
汚いトイレ...
こんなところで吐くなんて... イヤ... だけど...
「ウグッ...」

ふらっと前に倒れそうになったとき、あの人の腕が私の身体を支えて...

「吐いちまえ、全部出すとスッキリすっからよ」

そう言いながら私の背中をさすった。

い...いやだ...こんなところを見られるなんて...

でも... こみあげてくる吐き気を抑えられなくて...

「ウグッ...」

すっぱい液と唾液しか出てこない... いつもそう... パパが死んでから...

だけど...

大きな手で背中をさすられていたら... なんだか... いつもよりずっと早く楽になって...

「す...すみ...ません... もう... 大丈夫です」

「車酔いしたんかもしんねえな」

「え...あ...ええ...」

「やっぱ真理子ちゃん、部屋で休んでな、あとは俺が適当に運んどくからよ」

「あ... いえ、もう大丈夫ですから」

「ちっとは俺の言うこときけよ」

「え？」

あの人は苦笑いして、私の手を引っ張って部屋の中に入った。

「ここに寝てな」

あの人は煮しめたようなシミがいっぱいついたペタンコの座布団を二つ折りにした。

「ほれ、寝ろって」

こ... こんな汚い座布団に頭をつけるの？

でも...

しかたなく、横になると、あの人はガタガタッと押入れを開けて毛布を引っ張り出した。

「全部かたづけたら、ちゃんと布団敷いてやるからよ、今はこれでガマンしてくれよな」

私の上にフワッと毛布をかけて、

「ちゃんと寝てろよ」

そう言って部屋から出ていった。

なんか... この毛布... ヘンな匂いがする... 汗くさいっていうか... なんか...

畳に直接寝るなんてしたことないから身体が痛い...

なんだか私... とんでもないところに來ちゃったのかな... 何も考えずに... こんな...

天井を見ると、シミだらけでボコボコになっていて、蛍光灯の笠にホコリが積もってて...

あそこが押入れで... それから... え... 部屋って... ここだけ？

私の部屋は？ まさか、まさかここにあの人と？

ウソ、だって、男の人とひとつの部屋で... 寝るときも？ ウソ！

帰ろう！

ガバッと起き上がって...

もう帰る場所がないことを思い出した。

でも... だからって... こんな... こんなところで...

私、バカだ、こんなところに来ちゃって...

児童相談所に行けばよかった... その方がまだマシだったかもしれない...

ううん、ぜったいにマシ、だって、こんな部屋で、知らない男の人と暮らすなんて...

「なんだよお、寝てろつつったろ」

あの人ダンボールを2個抱えて入ってきた。

「あの...」

「ン？」

ヤッパリ児童相談所ニ行キマス...

「こんくらいあれば、しばらくはいんじゃねえかな、あとは冬物とか書いてあったからよ」

今さら... 言えない... だけど...

「必要なもんがあったら、いつでも言ってくれりゃ持ってくるからよ、な」

カエリタイ...カエリタイ...カエリタイ...家ニ...ワタシノ家ニ...

ゴキブリ

「このタンス、かあちゃんのなんだ」
あの人はそう言って煤けた古いタンスを指さした。
「真理子ちゃんの服はこん中に入れていいかな」

私の... ママが使っていた... こんな古ぼけたタンスを...

この中に私の服を入れてしまったら... もうここに住むってことで...
でも、ダンボールに入れたままにしてはおけな... え？
足に何かカサカサ触る... なに？

あっ！

「キャーーーーー！！」

「ど、どした？」
「へ...ヘンな...ム...ムシが...」
私は飛び跳ねるように部屋のすみに逃げた。

「あ？ どこだ？」
「そ、そこ、そこに...」
「ン？ ああ、いたいた、ゴキブリか」
あの人は、近くにあった新聞紙を丸めてバシッとゴキブリを叩いた。
「イッパツ！　へへへ」

そう言って笑いながら新聞紙をちぎってゴキブリの死体をつかんで窓の外に捨てた。

「やっぱ女の子だなあ、ゴキブリ怖いなんてよ」
「だ、だって、そんな、ゴ、ゴキブリなんて、見たことないし」
「へえ、ゴキブリ見んの初めてか」
「テ、テレビでは、あります、けど、そんな、家の中に、そんな、なんか、もう、なんか」
くちびるがプルプル震えて止まらなくて...
「もう、こんな、なんで、もう、イヤ！」
「あ？」
「イヤ！　もうイヤーーー！　ウッウッ...　ウワ〜ン」

何かが爆発しちゃって、私は声をあげて泣いた。

「ま、真理子ちゃん、そんな怖かったか」
あの人が私の肩に手を置いたから、
「イヤ！」

泣きながら振り払った。

「そっかそっか、そんなに怖かったか」

「イヤ！ もうイヤ！」

「だよな、そっか、うん」

「バカ！ もうイヤ！ バカーーー！」

私はあの人の胸をバシバシ叩いた。

バカみたい、子どもみたいに、こんなことで、わかってるのに、止まらない...

「よしよし」

あの人はそう言って、私をフワッと抱きしめた。

「ヤダ！ バカ！ 放して！ なによ！ イヤーーー！」

そう言って泣きながら、私はあの人のシャツをつかんでグイグイ引っ張った。

なにやってるの、私、バカみたい、だけど...

「よ～しよし、怖かったなあ、ごめんなあ、怖い思いさせちゃってなあ」

あの人がそう言いながら私の頭をなでたとき...

何かのスイッチを押されたように...

いろんな感情がドッと溢れて、私は子どもみたいにワアワア泣いた。

泣いても泣いても胸の奥からどんどん泣きたい気持ちが湧いてきて、

あの人のシャツをつかみながら... あの人のシャツに顔をうずめて大声で泣いた。

なぜ泣イテイルンダロウ...

頭のどこかでそんなことを考えながら...

自分がなぜ泣いているのかわからなくて...

だけど...

あの人のシャツにうずめた顔が涙と鼻水とよだれでビショビショになっても...

泣きたくて... ただ泣きたくて...

泣き止もうとすると苦しくて、また泣いて...

どれくらい泣いていたんだろう...

泣きつかれて... 頭の中が真っ白で...

泣きすぎて... ヒックヒックってしゃくりあげて... なかなかとまらなくて...

気がつく... あの人が私をフワッと抱いていて... ずっと頭をなでていた...

急に恥ずかしくなった。

私ったらバカみたい、ゴキブリのことでこんなに泣いて、子どもみたいに、バカみたい。

「す... すみません...」

私はそう言ってあの人の胸から顔を離した。

恥ずかしい、こんなところ見られちゃって、あの人の顔が見れない...

濡れた顔をあわてて手で拭こうとしたら、あの人が私の顔を覗き込んで、

「いっぱい泣いたなあ」

優しい声でそう言って、自分のTシャツのすそを引っ張って私の顔を拭いた。

「すみません... あの... すみません...」

「あやまんなくていいって」

「でも... あの...」

「そりゃ泣きたくなるよなあ、あんない家のお嬢さんなのによ、

こんなボロアパートに住まなきゃなんねえし、ゴキブリは出るしよ」

あの人はそう言って笑った。

「そ...そういう...わけ...じゃ...」

「いろんなことありすぎたもんなあ、お父さんが死んじゃって、家は出なきゃなんねえし、

そりゃ泣きたくなるよなあ」

「え...」

「泣きたくなったらいつでも泣いていいんだぞ」

あの人はそう言って私の頭をクシャシクシャとなでた。

「でもよ、真理子ちゃんのこと俺がぜってえ守ってやっからよ」

「え？」

「だから、なんも心配すんなよ、なんかあったらなんでも俺に言えよ」

あの人は私の顔を覗き込みながらそう言った。

「ゴキブリなんて俺がいつでも退治してやっからよ」

「ほ...ほんとに...」

「ああ、もう速攻で退治してやるって」

あの人はそう言って笑った。

「なんでも俺に言ってくれよな、遠慮なんかすんじゃねえぞ、兄妹なんだからよ」

「は...はい...」

私は...

この人の前であんなに取り乱しちゃって、あんなに泣いて...

恥ずかしいけど... なんだかちょっと... 気持ちが楽になって...

不思議... パパが死んだときは涙も出なかったのに...

パパが死んでから、心の奥のずっと奥にズドンと重たいものがあったのに...

今は少しだけ軽くなってる...

上目遣いでチラッと見ると、あの人は優しい顔して私を見てた。

悪い人じゃないかも... 悪い人だとは思ってなかったけど...

あっ

あの人のTシャツの胸のところが私の涙や鼻水でびっしょり濡れちゃってる...！

「あの、すみません、そこ... 汚しちゃって」

「あ？ ああ、ぜ～んぜんオッケ！ 気にすんなよ」

「すみません」

「つうかよ、妹が抱きついて泣いてくれるなんてよ、にいちゃん冥利につきるつつうかよ」

「え？」

「なんかすげえ嬉しかったよ、これからも泣くときはここで泣けよ、ここだぞ！ な！」

あの人はそう言って自分の胸を指差して笑った。

この人... 本当に私のことを妹みたいに思ってるんだ...

私はまだこの人のことをおにいさんのようには思えないけど...

さっき... 泣いてたとき... なんだか... どこかでホッとしてた...

あんふうに誰かの胸の中で泣いたことなんかなかったのに...

私... この人の胸の中で子どもみたいに声をあげて泣いた...

泣いて... なんだかとっても楽になって... パパが死んでからはじめて...

私はダンボールのガムテープをはがして、タンスの中に服をしまった。

荷物はあっという間にかたづいた。

だって、ほとんど入らなくてダンボールのまま押入れの下にあの人が押し込んで、あとは会社の倉庫に入れてもらうことになった。

あとは...

洗面用具の入ったポーチを...

「あの、どこで顔を洗うんですか？」

「そこだよ」

あの人はそう言って入り口脇の小さくて汚い流しを指さした。

「そ... それで、あの、洗面用具はどこに置いたら...」

「その上」

あの人の指差す方を見ると、流しの上に錆びた棚があって、洗面器が見えていた。

洗面器の横にポーチを置いた。

この洗面器... 色褪せて汚れがこびりついてる...

「真理子ちゃん、洗面器持ってきたか？」

「えっ、い、いえ」

ま、まさか、これを使うことになるの？

「そんじゃ、あとで買いに行くか」

ホッ... よかった...

「風呂行くときに不便だもんな」

「え？ 行く？ どこに...ですか？」

「風呂だよ、風呂、銭湯」

「銭...湯？」

「すぐ近くにあっからよ、歩いて行けんぞ」

お風呂がないの...

「晩メシ食ったら連れてってやるよ」

「は...はい...」

やだな... 銭湯なんて...

「おっ、あったあった」

押入れに顔を突っ込んで、あの人が何かを引っ張り出してきた。

古ぼけた箱...

「真理子ちゃん、見ろよ」

あの人は手招きして、うっすら埃のかぶった箱のふたを開けた。

その中には風呂敷包みと写真や封筒が入っていた。

「これはよ、かあちゃんの宝物だったんだ」

あの人は大切そうに風呂敷包みを開けた。

これは... ベビー毛布？

「これよ、真理子ちゃんのなんだってよ」

「え？」

「真理子ちゃんが赤ん坊るとき、いつもこれにくるんでたんだっつってた」

私が... この中に...

「真理子ちゃんチ出るとき、これだけ持ってきたんだっつっててよ」

そう言いながら、あの人は毛布を広げた。

「小せえよなあ、こん中に入ってたなんてよ」

あの人はそう言って笑った。

「真理子ちゃん、この前俺が置いてきた写真持ってっか？」

「え？ あ、はい」

私はトートバッグの中から大きな封筒を出して、あの人に渡した。

封筒の中には彼が置いていった書類も全部入ってる。

「あ、これこれ」

あの人は封筒に手を突っ込んで写真を取り出した。

「ほれ、この毛布、これだろ？」

小さな赤ちゃんが包まれている毛布の柄は、目の前に広げられたベビー毛布と同じで...

だけど、写真の柄はハッキリしてるのに、この毛布は色褪せてる...

18年間の月日が経っているんだもの...

私の本当のママは、これをずっと持っていた...

私はこの中に包まれていたことがある...

そっと毛布を触ってみたけど...

なんだか実感がわかない... わくわけないけど... 赤ちゃんのときなんだから...

「いつか真理子ちゃんに渡せたらいいなって思ってたんだ」

あの人はニッコリ笑った。

本当は... 感動しなきゃいけないのかもしれない...

でも... なんだか複雑な気持ち...

なんだか他人事みたいで、このベビー毛布を見ても何も感じない...

これに包まれてママに抱っこされていた記憶なんてあるわけがないし...

ママのことは何ひとつ覚えてないし...

「ママは...」

「ン？」

「あ... いえ、あの... 母は... どんな人...だったんですか？」

「顔は真理子ちゃんそっくりだよ」

あの人はそう言ってニッコリ笑った。

「ずっと貧乏暮らしだったから化粧なんてしたことなかったけどよ、それでもきれいで、
『おまえのかあちゃん、きれいだな』って友だちに言われてよ、
なんかすげえ自慢だったな、へへへ」

古ぼけた写真の中の顔しかわからない...私には...

「俺の親父が一目惚れしたんだってよ、親父の友だちのおっちゃんと言ってたんだけどな、
それでも、そんなとき親父は俺のお袋死んで男手ひとつで俺のこと育ててたからよ、
やっぱなんつうの？ ガキいんのによ、つきあってくれとは言えねえつつうかよ」

「あなたのお母さまは... 亡くなったんですか？」

「ああ、俺が3歳のときつつったかな、前のかあちゃんのことほとんど憶えてねえんだよな」

でも... 私の本当のママのことは... 憶えてるのよね... 私よりずっと...

「かあちゃんが親父と結婚したのはよ、同情したからだって、おっちゃんと言うんだよ」

「同情？」

「ああ、男手ひとつでガキ育ててかわいそうだからだってよ」

あの人はそう言って笑った。

「そうかしんねえな、金はねえし、学校だってほとんど行ってねえし、土方だったしょ」

「土方？」

「ああ、お袋死んでから俺連れてあちこちの飯場まわって仕事してたんだってよ、

それで、俺が小学校あがったばっかときに行った飯場で飯炊きしてたのが、かあ...」

あの人がチラッと私を見て...

「真理子ちゃんのかあちゃん、俺のことすげえ可愛がってくれてよ、

やっぱ、なんつうの、土方の子つつうんで、学校でけっこうイジメられてたんだけどよ、

ケガして帰ってくると、かあちゃんの方が涙いっぱいためて俺のこと見てよ、

薬塗って絆創膏貼ってくれてよ、それで、ひざに抱いてくれて...」

私は...

「その現場の仕事が終わって、別の現場に行くってことになったとき、
俺、『おばちゃんと離れたくねえ！』ってゴネてよ、親父は怒ってぶっ叩いたけどよ、
それでもイヤでギャーギャー泣きわめいてよ、そしたら、かあちゃんが、
『ノブちゃんのお母さんになる』って... そう言って...」

あの人の目が少しうるんで...

「俺、メッチャクチャ嬉しくてよ、かあちゃんに抱きついてワンワン泣いてよ、
それで親父のこと見たら、口ポッカーンと開けてボーッと立ってやんの！ ハハハ！」

ママは... この人のお母さんになることを選んだんだ...

私をあの家置いて... しかたなかったことだけど...

ママはこの人のそばにいた... ずっと... 私のそばじゃなくて...

なんだか...

私は...

色褪せたベビー毛布を箱にしまった。

焼きそば

目を開けたら... 部屋の中が薄暗い...

え？

私... 畳の上に寝てる... 毛布がかけられてて...

寝ちゃってたの？

いつから？

え...と... 片付けが終わって... それから... え...と...

憶えてない...

起き上がって部屋の中を見ると... あの人がいない。

薄暗い部屋に一人でいると、なんだか心細くて、
天井の真ん中にぶら下がっている蛍光灯をパチンとつけた。
蛍光灯で照らされた部屋の中はますます...なんていうか...貧乏くさくて...
なんだか... もっと心細くなってきた。

帰りたい... けどもう帰る家はなくて...
ずっとここで暮らすなんて... それしかないなんて...

「おっ、起きてたんか」
あの人が両手にスーパーの袋をぶら下げて入ってきた。
「晩メシは焼きそば作ってやっからな」
そう言って袋をドンと流しに置いた。
「それからよ、買ってきたぞ、ほれ」
あの人は別の袋からピンクの洗面器を出してみせた。

真ん中に... ウソ！ キティーちゃん？ 今ごろキティーちゃん？

「そいから、せっけん箱と、そうだそうだ、ちゃんとシャンプーとリンスも買ってきたかな」
そう言って出してみせたのは、よくテレビで宣伝してる安いシャンプーとリンス。
「あ、あの、シャンプーとかは... 持ってきました」
「なんだあ、そっかあ、ま、それがなくなったら使えばいいか、な」

そんなの使ったら髪がガサガサになっちゃう。

「あとは垢すりと、ハブラシとはみがきも買ってきたぞ、そいから歯あみがくときのコップな」

なにこれ... 全部キティーちゃんの絵がついてる...

「ここに置いとくかな」

あの人はキティーちゃんのコップに入れたキティーちゃんのハブラシとはみがきを、
流しの上の棚の青いコップの横に置いた。

なんで キティーちゃんなの!?

あっ、そんなことより...

「あの、すみませんでした、おいくらでしたか？」

「何が？」

「その、洗面器とか、あの買っていて、お支払いします」

「バッカじゃねえの、いらねえよ」

「い、いえ、そんな、私のものはちゃんとお支払いします」

「真理子ちゃんよ」

あの人が私のすぐ目の前にしゃがんだ。

「は、はい？」

「おまえ、俺の妹なんだぞ」

お... おまえ？

「アニキが妹の面倒みんのはあたりめえだろ？」

「で、でも...」

「金のことなんか心配すんなって、俺にまかせとけて、な！」

そう言って、あの人は、私の頭をクシャクシャツとなでた。

私は... 思わず... コクンとうなずきそうになって...

あわてて顔をそむけた。

「さてと、メシ作るか」

あの人はそう言って立ち上がった。

流しの上のスーパーの袋からごそごそと材料を出して...

こういうときって... やっぱり手伝わなきゃ...ね... でも...

「あの... 何か... 手伝います」

「おっ、そっか？ そんな、そうだなあ、ニンジン切ってくれっか」

「えっ、あ、は、はい」

ポンと渡されたニンジン一本...

えっと... 皮むくのよね... えっと... たしか一年のときの調理実習で習ったけど...

大きな包丁... こわいな... こ、ここから？ 太い方に包丁を入れ... グサッ

「キャッ！」

「どした？」

「あ、ゆ、指を、ちょっと...」

「え？」

あの人は血の出てる私の人差し指をつかんで... あーーーーっ！

パクッて口に入れたああああっ！ キャーーーーー！

「ちょっとこっち来いや」

私の指をつかんだまま、押入れ開けて、古ぼけた救急箱を開けた。

あの人は... 私の指にいていねいに消毒液を塗って...

私はボーッと見ていて...

こんなふうに傷の手当てをしてもらうのは... 小学校のときの体育で転んで...

保健室の先生にすりむいたひざに薬を塗ってもらったときくらいで...

「おっし、もう大丈夫だぞ」

あの人の声でハッとして、見ると、私の指にはバンドエイドが貼られていて...

「あ... す、すみません」

「そんな深くねえからすぐなおるって」

「あの... 私... すみません」

「あ？」

「私... 料理って... したことなくて... 調理実習のときも... デザート担当で...」

あの人は、一瞬ポカンとした顔して、そしてニコッと笑った。

「心配すんな、俺にまかせとけて、これでも小学校んときからメシ作ってたんだからよ」

「え？」

「かあちゃん働いてたからよ、米といだり、まあ、簡単なもんっきゃできねえけどな」

あの人はそう言って立ち上がった。

「真理子ちゃんはゴロンとしてテレビでも見てろよ、すぐできっからよ」

そう言うと、手早く野菜を切って、ザザザッと炒めて...

私は座ったまま、ボーッと見ていた。

なんだか...

なんだか... すごくみじめで... 何もできない自分が...

私は一人で生きていくことができない... 何もできない...

ひとりで生きていかなきゃいけないのに...

あの人の作った焼きそばは、お肉なんて入ってない野菜だけの焼きそばだけど...

「どうだ？ うめえだろ？」

「は、はい」

本当においしかった。

どうするんだろう... 私... 何もできなくて... これから... どうしたらいいんだろう...

なんだか不安でいっぱいになって、急に食べられなくなって...

「どした？」

私... ここにいていいんでしょうか... 何もできなくて... あなたの好意に甘えて...

でも、言葉が出なくて、私は黙ってあの人を見つめたままで...

「真理子ちゃん、具合悪くなったか？」

私は首を振るだけで...

「どした？ また吐きてえか？」

「な...」

声がかすれて...

「なんでも...ないです...」

「どした？ いいから言えよ、なんかしたんか？」

「ほ...んとに...なんでもないです」

「あっ、もしかして、焼きそばキライなんか？」

「そ...そんなこと...ないです...」

「なんだよなあ、どした？ 言えよ」

「え...な、なにも...ないです」

あの方は立ち上がって私の横にトスンと座った。

「真理子ちゃん、俺たち、今日から家族になったんだかな」

「え？」

「兄妹だろ、な？ 遠慮なんかすんじゃねえぞ、なんでも言いたいこと言えよ」

「は...はい」

「はいなんて他人みてえじゃん、うんでいいって、こうやって」

あの人が私の頭に手をおいて、コクンとうなずかせた。

「な？」

「は、はい」

「まったまたあ！ にいちゃんおしえたる？ うんだぞうん」

私は...

微笑んで私を見ているあの人の顔を... チラッと上目遣いで見て... そして...

コクンとうなずいてみた。

あの人の大きな手が、私の頭をくしゃしくやっとなでた。

夕暮れの町並み...

ゴチャゴチャと古い木造の小さな家が立ち並ぶ細い道...

自分がどこを歩いてるのかわからない...

「もうすぐだかな、ほれ、あすこにエントツ見えんだろ」
あの人指差した先に太いコンクリートのエントツが見えた。

路地を曲がった突き当たりに、「あさひ湯」って色褪せたのれんが下がった銭湯が見えた。
すごく古い...っていうか、ボロッチい。
これから毎日ここに通わなくちゃいけないの？
あの人に聞こえないように静かにため息ついでのれんをくぐった。

「男湯」と「女湯」って書いた板が貼ってある古い木の戸がふたつ。
「そんじゃ、あとでな」
あの方はそう言って男湯の戸を開けて中に入って行った。

フウ...

今度は大きくため息ついて、女湯って書いてある戸を開けた。

うわ... はだかの女の人たちがいっぱい...
え...っと、どうすればいいの？
「お客さん、お金お金！」

え？

振り向くと高い台の上に座ったおばさんが私を手招きしていた。
「あ、す、すみません」
「おばちゃ〜ん、こいつ、俺の妹」
おばさんの向こう側からあの方が顔を出した。
「あれ、そうなのかい？ あらあらまあまあ、ノブちゃんが言ってたあの妹さんかい」
「ああ、かあちゃんに似てんだろ」
「そう言われりゃそうだねえ、美里さんに似てるねえ」

ママのこと... 知ってるの？

「これ、こいつの分な」

あの人がそう言って小銭をおばさんに渡した。

「あ... あの、私、自分で払いますから」

「いいから、俺にまかせとけて」

「あらあら、ノブちゃんたら、すっかりおにいちゃん風ふかせちゃってさ、アハハハ」

「ったりめえだろ？ アニキだもんよ、真理子ってんだ、おばちゃん、よろしくな」

「あいよ、でも、よかったねえ、兄妹で暮らせるようになってさあ」

私は... なんと返事していいのかわからなくて...

「ノブちゃん、あんた、ずっとそこにいたら覗いてると思われるよ、あっち行きな」

「あ？ ああ、そっか、そんじゃな」

あの人がニコツと笑って奥へと入っていった。

銭湯のおばさんまで、私のママのことを知ってる... 私が知らないママを...

みんなが堂々とはだかで歩き回っている脱衣所のいちばんすみのロッカーの前で、私はこそこそと服を脱いだ。

キティーちゃんの... ハア～... 洗面器にボディシャンプーや洗顔フォーム、あとはシャンプーとコンディショナーとそれから？

あ、キティーちゃんの垢すり... ハア～...

大きなガラスの引き戸を開けて... それから？ どうすればいいの？

「ちょっとお、あんた、そこに立ってたらジャマだよ」

「あ、す、すみません」

私の横をすり抜けていったのは金髪の... あっ 腕にへビの模様の入れ墨...

こ...わ～い... やだあ、もう、帰りたい... 帰るって... もう家はないんだった...

開いてる蛇口の前を見つけて、そこにしゃがんだ。

横にいる人をそっと盗み見しながら、真似をして身体を洗いながら、

なんとなくまわりを見ると、みんな手馴れてて、笑いながらとなりの人と話してたりして...

なんだかちがう世界... きっとずっとなじめない... なじみたいと思えない...
たかがお風呂に入るだけでこんな重たい気持ちになるなんて...
ホディシャンプーの香りだけは前と同じで... ちょっとだけホッとする...

シャンプーして顔も洗ったら、少しだけ気持ちが落ち着いてきた。
あとは... あの大きな浴槽に入るのね... みんなと... やだな... でも...
足を入れた途端、「アッ...」ツーーーーーイ！
よくみんな平気で入ってるわね、こんなのヤケドしちゃうよ。
ゆっくりゆっくりゆ〜っくり身体を沈めて...
あ〜あ... うちのお風呂が懐かしい。
昨日まで入ってたのに、もう遠い昔みたいな気がしてきちゃう。

ずっと... あのお風呂に入るのがあたりまえだった...
ずっと... あの生活が続くと思ってた... ううん、意識もしてなかった...
ずっと... あの家に住んで、パパや佐島さんがいて、学校に行って...
こんなに急にすべてが壊れてなくなっちゃうなんて... ほんとはまだ信じられない...
もしかしたら明日になったら、また前の生活に戻ってるんじゃないかって...
そうだったらいいのに... そうだったら...
なんだか... 気持ち悪い... 頭がボーッとして... あ、あがろう...
立ち上がった途端、目の前がチカチカして、あ... めまい... あぶ... な...

目を開けたら...
何人もの人が私の顔を覗き込んでいた。
え？ なに？ どうしたの？
「ああ！ 気がついたよ！」
「大丈夫かい？」
「ノブちゃん！ 気がついたよー！」

私... どうしちゃったの？

気がつくと脱衣所の床に寝かされていた。

え？

身体を動かしたらパサッとバスタオルが落ちて... え？ やだ、私、はだかで寝てたの？
あわてて起き上がろうとしたら、まだ少しめまいがした。

「大丈夫かい？」

「は...はい...」

「湯あたりしちゃったんだねえ」

やだ、みんなに見られてたんだ...

「す、すみません、あの、もう、大丈夫です」

恥ずかしくて、バスタオルで前を隠して立ち上がった。

やだ、私ったら、お風呂で倒れたんだ、やだ、みんなに見られて...

あれ？ このバスタオル... 誰の？

「ああ、それ、あたしんだよ」

金髪の入れ墨の女の人がそう言って手をのばした。

「あ... す、すみません、あの、ありがとうございました」

「頭打たなくてよかったね、アハハハ」

わ... 笑い事じゃないわよ... ううん... 笑われてる... きっと笑われてた...

急いでロッカーから着替えの服を引っ張り出して着ると、荷物をバサバサっと
トートバッグの中に突っ込んで、逃げるように脱衣所を出た。

外に出ると、あの人が立っていた。

「真理子ちゃん、大丈夫か？」

心配そうに私の顔を覗き込むから、私は思わず顔をそむけた。

やだ...もうやだ...

「髪の毛濡れてんじゃんよ」

あの人はそう言うのと首に下げていた自分のバスタオルをバサッと私の頭にかけた。

え？

「風邪引くぞ」

そう言いながら、私の髪をタオルでゴシゴシ拭くから、

「あ、あの、いいです、自分でやりますから」

「いいからいいから、にいちゃん拭いてやっから」

だって、このタオル... この人ので、これで身体拭いたんでしょ？ やだあ...

「いつかな」

あの人は私の髪を拭きながら...

「風呂付きの部屋に住めるようにすっからな」

え？

「にいちゃん、がんばって働いて、もうちっといい部屋に住めるようにすっからよ」

あの人の手は大きくて...私の髪を優しく拭いて...

「だから、もうちっとガマンしてくれよ、な」

こんなふうに...誰かに髪を拭いてもらったことなんてなかった...小さい頃から...今まで...

「明日からよ、ガンガン働いてよ、給料あがるようにがんばるからよ」

あの人の声がタオル越しに聞こえて...

「つってもな、小せえ工場だかなあ、そんなに金もらえねえけどな、ハハハ」

私は... あの人のタオルに頭からすっぽり包まれながら...

「でもなあ、妹のためだもんな、俺、がんばって働くからよ」

あの人の大きな手で...ピリピリしていた神経が...ふんわりとほぐされていくのを感じてた。

ママのこと

真っ暗な部屋の電気をパチンとつけて、あの人がコタツテーブルの前にあぐらをかいた。帰りに寄ったコンビニで買ったビールとジュースが一缶ずつテーブルの上に乗っている。

あの人がビールのプルトップをプシュッと開けて、ゴクゴクッと飲んで、
「あーっ、うめえ！」
そう言ってニッコリ笑った。

こんな時間に男の人と二人きり...
男の人って“おにいさん”だけど... ほんとのおにいさんじゃない...

「なんか好きなテレビあったら見ていいんだぞ」
あの人はそう言ってリモコンを私の方にすべらせた。
「いえ... べつに...ないです」
「真理子ちゃんて、夜はいつも何してたんだ？」
「え... 部屋で勉強したり...」
「すげえなあ」
「そんな...すごく...ないです、宿題と予習くらいで...」
「俺なんてぜ〜んぜん勉強しなかったもんなあ、アッタマ悪くてよ」
あの人はそう言って笑った。
「そういや、真理子ちゃん、そろそろ学校行かねえとマズイんじゃないの？」
「え... あ、はい、ほんとは...」

ほんとは明日から行こうと思ってたんだけど...

「明日から行くか？」
「え？ あ、はい」
「ほんじゃ、俺も一緒に行くからよ」
「えっ？ な、なんでですか？」
「だってよ、なんつうの、いちおう保護者ってことでよ、挨拶しねえとよ」
「あ... い、いいです、大丈夫です、私から話して...おきますから」
「んなわけにはいかねえよ、やっぱビシッとすることはしとかねえとな」

そんな... だって、なんて説明するの？ 兄？ 血がつながってないのに？
ていうか、まだ会ったばかりの人なのに、一緒に暮らしてるなんて... 言えない... そんな...

まだ会ったばかりなのに... 今こうして... この人の部屋にいるんだけど...

「真理子ちゃんは、んっとにかあちゃんに似てんなあ」

私は... この人が“かあちゃん”と言うのを聞いても、
それが私のママのことだと思えなくて...

「あの... 母は...」

「ン？」

「どうして亡くなったんですか？」

彼はチラッと私を見て...

「心臓悪くてよ」

そう言って煙草に火をつけた。

「何年も悪かったんだけどな、無理して働いてたんだよな、そんでぶっ倒れてよ」

あの人はフーッと煙を吐いて...

「手術すりゃも少し生きられたんだけどよ、心臓の手術って金かかんだよ」

今度はグビクビッとビールを飲んだ。

「そんなときは俺もまだ17だよ、働き始めて2年っきゃ経ってねえから給料もすんげえ安くてよ、
手術する金がなくて...」

あの人はそう言ってちよっとくちびるを噛んだ。

そして、私の方を真っ直ぐに見て...

「真理子ちゃん、ごめんな」

「え？」

「俺がもっと甲斐性があったらよ、かあちゃん死ななくてすんだのによ」

「そ...んなこと...」

「手術させてやれりゃ、今頃かあちゃんと会えてたかもしんねえのによ」

「でも...それは...しかたないことですから...」

私は... 正直... 他人事みたいで...

「かあちゃん、真理子ちゃんに会いたがってたかなあ」

「え？」

「もう中学生になってんだろなあ...とかよ、どんな娘に育ったんだろあねえとか言ってよ」

あの人はそう言いながら煙草を吸って...

「俺さ、連れてきてやるつつったんだよ、そしたらえっれえ怒られてよ」

そう言って苦笑いした。

「あの子は今シアワセに暮らしてんだから、私のことなんか知らせちゃダメだつつってよ」

そんなこと...言ってたの...

「でもな、でも、もしもあの子に何かあったときには助けてやってくれってよ」

あの子はボーッと何かを思い出してるみたいに...

「死ぬまで真理子ちゃんのこと言ってたんだ、俺に、たのむよって」

目が見る見る赤くなって...

あの子はまたグビグビッとビールを飲んだ。

私は... 自分の母親の話を聞いている気がなくて...

この人のおかあさんの話を聞いているような... そんな気しかなくて...

「俺さ、かあちゃん死んだ後、真理子ちゃんチに行ったんだ」

「えっ？」

「つっても、そばまで行っただけなんだけだよ」

「いつ...ですか？」

「三年前、かあちゃん死んですぐかな、いちおうな、いちおう知らせた方がいいかなって」

「そう...ですか...」

「でもな、あの子見たらビビった」

あの子はふざけた顔をして、

「俺なんかいなくてもぜ～んぜんオッケーじゃんよって」

そう言って笑った。

「そんなときよ、俺、真理子ちゃんのこと見かけたんだ」

「え？」

「車から降りてきたんだよな、制服着てよ、あんなとき俺が19だから中学くれえだったんかな」

「あ... 学校の帰りだったかも...」

「車で学校行ってたんか？」

「え、ええ、行き帰り...車で...」

「そっかあ、そんじゃ、そんなときかなあ、うわあっすんげえ可愛いじゃんって思ってよ」

あの子は少し赤くなって笑った。

私は... どんな顔したらいいのかわからなくて...

「まあ俺の出番は一生ねえかもしんねえけど、なんつうの？ あれが俺の妹なんだって、
そう思うだけで、なんか嬉しくてよ」

この人は... そんな何年も前から私のことを知ってたんだ...

「そしたら、これがなんと！ 俺の出番が来たじゃん！ ヤッタ！つつうカンジ？」

あ、んなこと言ったら真理子ちゃんの親父さんに悪いけどよ」

「私のこと...」

「ン？」

「あの... 本当に... 妹だって... 思えるんですか？」

あの人は私の顔を見て...

「俺が真理子ちゃんのこと知ったんは、小学校の... 5年ときだったかなあ」

「え？」

そんなに前から...

「俺のオヤジよ、俺が4年生んときに死んだんだ」

「えっ...」

あの人は煙たそうな顔をして短くなった煙草を吸うと、

「現場で事故に遭ってよ」

そう言いながらグイッと灰皿に押しつけて消した。

「そんでなくても貧乏だったのによ、オヤジいなくなってかあちゃん一人で働いてだろ、
なんつうの、ド貧乏っつうの？」

私は...

「そうすつとよ、やっぱイジメられんだよ、学校でよ」

胸がぎゅうっと...

「そんで、なんつうか、グレて、悪ガキンなってよ、かあちゃん、何度も呼び出されてな」

あの人はそう言って苦笑いした。

「そんで、いつだっか、かあちゃんが...」

あの人は押入れの方を見て...

「あの真理子ちゃんの毛布と写真見せてくれてよ」

「え？」

「おまえには妹がいるんだよっつってよ、俺、ビックリしてよ」

あの人はそう言って笑った。

「わけがあって一緒に住めねえけど、おまえはにいちゃんなんだから、
もしも妹になんかあったら助けてやれる男になれって言われたんだ」

その“妹”は... 本当に私のことなんだろうか...

「俺、妹がいるっつうのが嬉しくってよ」

だけど血がつながっている妹じゃないのは、この人だってわかってるのに...

「おっし、俺がいつかかあちゃんと妹の面倒みるんだってよ、
そんなときから新聞配達バイト始めて、中学んときは年ごまかして土方やってよ」

この人の言う“かあちゃん”が私の本当の母親のことだとは思えなくて...

「俺、中坊んときから背え高かったからよ、18だっつってごまかしてよ、ハハハ」

この人の中の“妹”は... 私ではなくて... 本当はちゃんと他にいるような気さえして...

「だからよ、こうやって一緒に住めるようになるなんて夢みてえだよ」

あの人はそう言って微笑むけど...

私は...この人の中の“妹”の代わりなんじゃないかって...

この人は“妹”っていう幻を持ち続けてただけで...

だって、この人と私は血なんてつながっていない他人同士で...

血がつながっていなくても小さい頃から一緒に育ったとか、そういうのでもなくて...

ついこの前会ったばかりの他人... ただの他人...

「俺、金はねえけどよ、真理子ちゃんのこととはちゃんと面倒みっからよ、
だからなんも心配すんなよ、な！」

そんなことを言ってもらうのが悪い気さえして...

私は黙ってテーブルの上のジュースの缶を見つめていた。

トイレ

どうするの？

あの人と私...

やっぱり同じ部屋で寝る...のよね？

だって部屋はひとつしかないんだもの。

あの人が押入れから布団を出して手際よく敷いていくのをボーッと見ながら考えていた。

「これはかあちゃんが使ってた布団だからよ、真理子ちゃん、これで寝ろよ、な」

「は...はい...」

二組の布団が少しだけ間を開けて畳に敷かれていた。

もーっと間を開けてほしいけど、部屋が狭いからこれがギリギリなんだけど。

「寝る前に便所行ってこいよ、廊下の電気切れてっから夜中に行くと怖えぞ」

あの人はそう言って笑った。

「え...あ...は...はい...」

たしかにトイレに行きたい、ずっとガマンしてた、だって、あのトイレ... 汚いんだもの。

「どした？ ついてってやっか？」

「い、いえ、ひ、ひとりでいきます」

行きたくないけど、でも、もう限界...

暗い廊下の突き当たりのトイレ。

汚い木の戸で、開ける前からくさい...

息を止めて戸を開けた。

裸電球が一個プラ〜ンと下がっているだけの薄暗いトイレ。

床がすごく汚れてて、便器も汚れてて、しかも和式で...

できるだけつま先で立つようにして便器をまたいで、目の前のさびたパイプにつかまって...

片手でジーンズと下着を下ろして中腰のまま...

はああああああ

脚がプルプルするううう

片手でトイレトペーパーを... ない！

ウソ！ やだ！ 予備は？ あ... 上の棚に...ホッ...

なんでトイレひとつでこんな苦労しなきゃいけないの？

こんなところでゆっくり用なんて足せない、どうしよう、便秘になっちゃう。

学校のトイレでする？

やだなあ、長く入ってたら、大きい方だってみんなにバレちゃう。

また片手で下着とジーンズを上げて、はあ～...

水を流して、つま先で... アッ

「キャーーーーー！」

ツルッとすべってズテンツてしりもちついたあっ！

しかも、便器にお尻が入っちゃったああああっ！

「キャーーーーー！ もーーーーーっ！ やだやだやだやだーーーーー！」

サイテー！ 汚なーーーーい！ 死にそう！

立ち上がったけど、お尻はベチョベチョで手も床について汚れて...

「キャーーーー！ 気持ち悪るーーーーい！」

ドンドンドンと戸を叩く音がして、

「真理子ちゃん！ どした？」

あの人の声。

やだ、こんな姿見られるの... だけど、このままじゃ...

ガチャッとカギを開けると、あの人がビックリした顔で私を見た。

「ど、どした？」

私は... なんだか... すごーーく腹が立ってきて...

「もうっ、バカーーーーー！」

あの人に向かって叫んでた。

「便所に落ちたんか？」

「こんな、こんな汚いトイレなんかイヤーー！ バカバカバカーーー！」

「お、おし、とにかく部屋行って着替えた方がいいな」

あの人は私の肩を抱いて廊下を歩いた。

「なによっ!? あんなトイレ！ サイテー！ もう絶対！二度と入らない！」

「よしよし、悪かったなあ、ごめんなあ」

「なんであなたが謝るんですか！ あなたのトイレじゃないでしょ！」

「そうだけどよ、真理子ちゃん来んなら掃除しときゃよかったな、ごめんな」

わかってる、この人に八つ当たりしたってしょうがないって、わかってるけど、

怒りがおさまらなくて、怒ってないと気が狂いそうで、私はずっと怒ってた。

ボコボコのアルミのヤカンから勢いよく湯気が出た。

あの人が洗面器にお湯を注いで、水道の蛇口をひねって水を足した。

「おっし、こんくらいかな」

そう言うと、洗面器の中に擦り切れたタオルを浸した。

「これで身体拭けよ、そんで、服はこの袋ん中に入れて」

ビニールのゴミ袋を出して広げた。

「明日コインランドリーで洗ってきてやっからな」

「いいです、もう、これ、捨てますから」

「もったいねえじゃん、まだぜんぜん着れんじゃんよ、洗えば大丈夫だって」

いやだ、こんな、トイレに、あんな汚いトイレで汚れた服なんかもう着たくない。

「俺、ちょっくら出かけてくるからよ、真理子ちゃん着替えたら先に寝てていいかな」

あの人はそう言って外に出ていった。

どこに行くんだろう... どうでもいいけど...

私は下着まで全部脱いでビニール袋の中に入れてギュッとしばった。

何回も何回もタオルで身体拭いても、なんか気持ち悪い。

シャワー浴びたい。

だいたいこの部屋、お湯も出ないなんて。

いちいちこんなヤカンで沸かさなきゃならないなんて信じられない。

洗面器のお湯を何回もかえて、ゴシゴシ体をこすってたらヒリヒリしてきた。

なんかもうやだ、こんなの...

ここに来るって決めたのは私だけど、だけど、まさかこんなところだと思わなかったんだもの。

これだったら児童相談所の方がずっとマシだったかもしれない。

だって、こんなところで、ちゃんとした生活なんてできない。

まだ一日目なのに、神経がピリピリしちゃて、イヤことばかりで...

最後に全身にベビードールをシュッとふりかけて、パジャマに着替えた。

あの人、外で待ってるのかな？

ドアを開けると... あれ？ いない？

え？

廊下の突き当たりがぼんやり明るくて人影が見える。

誰？ このアパートの人？

目をこらしてよく見ると... あ... あの人だ。

何してるの？

私はおそろおそろ近くに行ってみた。

「えっ!？」

私の声に、あの人振り返り向いた。

「ああ、真理子ちゃん、もう終わったか？」

「は...はい...あの...」

「よし！ 終わったぞ！」

あの方は満足そうにそう言って、手に持っていた汚い雑巾をそばにあったバケツに入れた。

「真理子ちゃん、これで明日から安心して便所に入れるかな」

「え？」

あの方の後ろから覗いてみると... あの汚かったトイレがきれいになっていた。

「あの... これ...」

「いちおう月一回大家が来て掃除してくれることになってんだけどよ、

このボロアパートだろ、ぜ～んぜん来ねえでやんの、ハハハ」

この人... こんな夜にトイレ掃除してたの...

「かあちゃん生きてた頃はよ、かあちゃんが毎日掃除してたからきれいだったんだけどよ、

かあちゃん死んだら誰もやんねえからよ、俺も汚ねえのに慣れちまって気いつかなかったな」

私の...ために...

「今度からちゃんと掃除すっからよ、ごめんな」

「ごめん...なさい...」

「な～んで真理子ちゃんがあやまんだよ？」

「私が...あんな大騒ぎしたから...」

「可愛かったよ」

「え？」

「子どもみてえでよ、ハハハ」

「ごめんなさい」

「バ～カ、あやまんなって、気がつかなかったにいちゃんが悪かったんだからよ」

「悪く...ないです...あなたは...悪いのは...」

「掃除しに来ねえ大家か！ アハハハ」

「あ、あの、私、お湯沸かしてきます」

バタバタと廊下を走って部屋に入った。

ボコボコのヤカンに水を入れてお湯を沸かした。

あの人が手を洗えるように…。

あの人がヨレヨレのＴシャツとジャージに着替えて、

「電気消すぞ」

そう言ってパチンと蛍光灯を消した。

真っ暗な部屋の中。

まだ会って三回目の男の人と隣同士で寝ている。

だけど…

へんなの…

なんだか安心する… 一人じゃないって… いつも一人で寝ていたのに…

布団がカビくさくて、ちょっとイヤだけど…。

目を開けたら... 煤けた天井が見えた...
もう一度目をつぶった...

眠っていたい... ずっと... だって... 目を開けたら...

「真理子ちゃ〜ん！ そろそろ起きろよお」

現実があるんだもの...

昨日一日ですごく疲れちゃって... 身体が重い... でも... 起きなきゃ...
のそのそと起き上がると、となりのあの人の布団はとっくになくて、
「おう、起きたか、おはよう」
あの人がコタツテーブルを出しながらニッコリ笑った。
「お、おはようございます」
寝起きの顔を見られたのが恥ずかしくて、あわてて立ち上がった。

小さな流しの前の小さくて汚い鏡を見ながら歯を磨いた。
バシャバシャって、ヒャッ、冷た〜い！
水しか出ないんだった...
顔がこわばっちゃう...
タオルで顔を拭いて、化粧水をパシャパシャッとつけたら、ふうっ、なんとか目が覚めた。
ふり返ったら、あの人が私の布団をたたんでいた。
「あ... すみません、私やります」
「んなことより、真理子ちゃん、学校行くしたくしねえとよ」
「あ...」

そうか... 今日から学校に行くんだった...

古びたタンスにかけておいた制服...
もう何ヶ月も着てなかったような気がする...
パジャマを脱い... あっ...
「あの... 着替えたいんですけど...」
「あ？ あっ、そ、そっか、俺、外に出てっからよ」

あの人はあわてて部屋の外に出ていった。

着替えのたびにこんなことしなきゃいけないなんて、すごく不便。

だって部屋がひとつしかないんだもん。

どうしてひとつしか部屋がないのに、私のこと引き取ろうなんて思ったかなあ。

私の本当のママが「もしものときは真理子を守ってくれ」って言ったから？

だからって、こんな狭い部屋に...

せめて部屋の真ん中にカーテンつけてくれればいいのに。

つけてもらおうか？ でも、居候なのにそんなこと言えないし....。

はぁ～ってため息ついて戸を開けて、

「終わりました」

壁にもたれて立っていたあの人がちょっと驚いた顔で私を見た。

「や、な、なんつうか、制服着っと、やっぱ女子高生ってカンジすんなあ」

だって女子高生だもの、あたりまえじゃない、何言ってるの？

「そんじゃメシ食うか」

あの人はチラッと私を横目で見て、部屋の中に入ってきた。

満員のバスの中。

ぎゅうぎゅう押されて吐きそう。

朝からごはんなんか食べたから... いつもパンだったのに... しかも納豆で...

納豆、キライじゃないけど、学校行く前に納豆なんて、

もう一度歯を磨いてきたけど、なんだかまだ匂ってそう....。

「真理子ちゃん、大丈夫か？」

そして、あの人も一緒。

担任に挨拶するからって、背広なんか着て...

「俺につかまってるよ」

誰が見ても安物ってわかるペラペラの生地、しかも袖のところが擦り切れてるし。

一張羅だって言ってたけど、もう少しちゃんとしたのを買えばいいのに....。

パパのスーツはどれも特別仕立てだった。

生地はイタリアやフランス製で... 一枚持ってきてあげればよかったかなあ...

でも、この人、パパより背が高いからサイズが合わないわよね。

私の目の前にあの人のネクタイが見える。

すっごく趣味が悪い... 趣味が悪いっていうより、安くさいっていうか...

あっ... 下の方が上より長くなってる。

「あの...」

「あ？」

「ネクタ...」

突然バスが...

「アゝーーーーー！」

急カーブするから、私は倒れそうになって、思わずあの人のネクタイつかんじやって...

「ウグッ」

あの人がグイッと私の身体を片腕で支えてくれた。

「ご、ごめんなさい」

あわててネクタイから手を放したけど、結び目がグチャグチャになっちゃった。

「あ、あの、ネクタイ...」

「あ？ ああ、いいって、あとで直すからよ」

「すみません」

「だからちゃんと俺につかまってろって」

「は...はい...」

「あ、ネクタイにはつかまんねえでくれよ、死にそうになったからよ、ハハハ」

や、やだ、大きい声で、まわりの人たちがチラチラこっち見て笑ってるじゃない。

バス停にとまるたびに人が増えて、もう身動きができない。

私のとあの人の身体がピタッとくっついちゃって、顔があの人の胸に、やだ、なんか...

なんかこれって... 困ったな... 男の人にこんなにくっついちゃうなんて初めてで...

男の人っていうか、いちおうお兄さんなんだから... 血はつながってないけど...

他人と同じ...っていうか、他人だけど、でも、いちおうお兄さんってことだから...

でも、いくらなんでもこの状態は...ねえ...なんか抱かれてるみたいで...ちょっと...

もう少し顔あげよう...って、グイッと顔あげたら、

ガツッ

「イデッ」

「あっ...」

あの人のくちびるから血が出てるうっ！

「ご、ごめんなさい、あの、えっと、い、今、ティッシュを…」

…って言ったけど、手が動かせない、どうしよう

「平気だからよ、気にすんな」

あの人は苦笑いしてくちびるの血をペロツとなめた。

「あの、本当にごめんなさい、私…」

「いいから、気にすんなって」

あの人はそう言って私の頭をグイッと抱き寄せた。

そして、私はまたあの人の胸に顔をうずめてる…。

「次は誠光学園前、誠光学園前」

はああああ、やっと着いた。

バスを降りると見慣れた光景、私の高校の建物、なんだかホッとする。

「玄関どこだ？」

あの人の声に振り向くと、あっ… ネクタイがぐちゃぐちゃのまま。

「あの、ネクタイが…」

「あ？ ああ、そっか」

…って、直したけど、

「あの、下の方が長くなっちゃってるんですけど」

「あ？ あ、ほんとだ、ハハハ、ネクタイってほんとんどやったことねえからよ」

そう言いながら直したけど、まだ下が長い。

「ボタンかけときゃ見えねえよな」

あの人はそう言って笑うけど、

「あの、すみません、ちょっと、こっちに来てください」

私はあの人の手を引っ張って人通りの少ない脇道へつれていった。

「どした？」

「あの、私が直してもいいですか？」

「あ？」

「ネクタイ、私に直させてください」

「あ、ああ、いいよ」

私はネクタイをほどいて… ほら、安物だからすべりが悪いたら…

右と左の長さを調整して... ふつうはここで一回巻くけど私は二回巻くの... だって...

「真理子ちゃん、うめえなあ」

「父の... 小学校の頃は父のネクタイ結んでたんです」

そう... まだあの新しい奥さんが来るまで、私がパパのネクタイ結んであげてた。

パパが結んでるのを見て、やらせてって言ったら、パパが教えてくれた。

「ここで二回巻くと結び目がしっかりして見えるんだよ」

「真理子にネクタイ結んでもらえるなんて、パパはシアワセだなあ、ハハハ」

それからは、毎朝、私がパパのネクタイ結んで...

忙しいパパとの唯一の二人だけの時間だった...

でも、もう... もう...パパは...

「真理子ちゃん、どした？」

「な...んでも...な...いです...」

やだ... 涙が出てきちゃって... やだ... パパのこと... 思い出して...

あわててポケットからティッシュを出して涙を拭いてると、大きな手がふわっと頭の上に...

「ありがとな」

そう言って優しく私の頭をなでて...

顔をあげると、あの人が優しい目で私を見ていた...

パパは... もういない...

私... まだパパはいて... いつも仕事で忙しくて... だから... まだパパが...

だけど... もうパパは... 本当にパパは...

「死んじゃった...」

自分の言葉で涙が溢れてとまらなくなった。

やっと... やっと実感が湧いてきた... パパはもういないって... 二度と会えないって...

「やだ...や...だ... 死んじゃうなんて... やだ...」

バカみたい... 今頃になって... やっと...わかるなんて...

「やだよなあ、親が死ぬってのはよ」

あの人の言葉が... 私と同じ気持ちみたいで... 同じみたいで... 私は...

「た...すけ...て...やだ...こんな...こんなの...」

あの人のすがりついて泣いた。

「俺がいるかな」

あの人は私を抱きしめて...

「ひとりじゃねえからな、真理子ちゃんには俺がついてっからよ」

そう言って頭をなでて...

「な〜んも心配すんじゃねえぞ、な」

私はあの人の胸の中で泣きながら...

この人がいてよかった...

ちょっとだけ... そんな気持ちになっていた。

「真理子の兄の中原伸男です」

あの人は職員室中に聞こえるような大きな声でそう言って、私の担任にお辞儀した。

「まあ事情は香山くんのお父さんの弁護士さんから聞きましたがね」

先生はあの人を上から下までジロジロと見ながら言った。

「お兄さんといっても、血のつながりはないわけですよね、つまり...」

「血がつながってねえ兄弟なんていっぱいいるじゃないスカ」

あの人はそう言って笑った。

「まあ、そうですが...」

先生は少し困った顔をして、今度は私を見た。

「それで、香山はどうだ、少しは落ち着いたか」

「は...はい...」

「うん、まあ、いろいろと大変だったな、あんまり気を落とすなよ」

「はい」

先生の慰めの言葉が... 慰めてるつもりの言葉が... 頭の上を通りすぎる...

「それじゃ、教室に行きなさい」

「はい」

「先生、真理子をよろしくお願いします」

あの人が、また職員室中に響くような声でそう言って深々と頭を下げた。

「あ、はあ、わかりました」

先生はちょっと困った顔をしてそう言った。

廊下に出た途端、

「はあ〜、すっげえ緊張したあ」

あの人は大げさにヘナヘナっと倒れそうな恰好をして、

「俺、中学も口クに行っただろ、職員室ってば叱られるとききゃ入ったことねえからよ」

そう言って笑った。

「ありがとうございました」

「な〜に言ってんだよ、なんつったって俺は真理子ちゃんの保護者なんだからよ」

「それじゃ、私、教室に行きます」

「そっか、しっかり勉強しろよ！...な〜んて、俺が言えるかっっちゃうの、ハハハ」

なんとなく... 心細い気持ちで... 教室に向かおうとすると、

「あっ、ちょっと待った」

あの人に呼び止められた。

「これこれ」

そう言って手に持っていた汚いナップザックからスーパーの袋を出した。

「弁当」

「え？」

「昼メシの弁当だよ」

そう言って私の手にスーパーの袋をつかませた。

「にいちゃん特製弁当！ つっても握りメシだけどな、へへ」

「あ... すみません...」

「そんじゃな」

あの人は私の頭をくしゃくしゃとなでると、手をふって玄関へと歩いていった。

お弁当のことなんて忘れてた...

袋の中を見ると、アルミホイルの丸い塊がふたつ入っていた。

前は... パパが生きていた頃は... 毎朝佐島さんが作ってくれていた。

赤い漆塗りの小さなお弁当箱に色とりどりのおかずが入っていたっけ。

「香山さんのお弁当って、いつも料亭のお弁当みたいにきれいよね」

みんながそう言ってたけど、私にはいつものことで、いつものお弁当で...

明日から自分で作らなくちゃ... でも、お弁当なんて作ったことない...

はあ～... 考えなきゃいけないことや、やらなきゃいけないことが多すぎて...

なんだか疲れた気持ちで教室に向かった。

教室のドアを開けると、みんながいっせいに私の方を見た。

やだな... どんな顔すればいいの...

「香山さん！」 「真理子さん！」

何人かが私のそばに走り寄ってきた。

「元気？」

「うん」

「大変だったね」

「うん、まあ...」

「今、どこに住んでるの？」

「え... あの... し、親戚の家に...」

「そっかあ、香山さんの親戚だったらみんなお金持ちだからねえ」

ぜんぜんお金持ちなんかじゃないの... むしろ貧乏で... 一部屋だけで...

「ねえ、さっき見たんだけど、あの男の人って、香山さんの親戚？」

「え？」

「ちがうわよねえ、お葬式で見たけど香山さんの親戚って、みんなもっとビシッとしてたもん」

「そっかあ、使用人の人かなにか？」

「え... あ... まあ...」

「ほらあ！　なんかヨレヨレの背広着てたもん、絶対ちがうと思った」

「ねえ、落ち着いたら遊びに行ってもいい？」

「え？」

「親戚のお家だと、迷惑かなあ？」

「え...あの...」

そのとき、始業のベルが鳴って、みんなあわてて自分の席に戻っていった。

私はまわりにわからないように、フウ〜ッとため息ついた。

学活が終わって、時間割どおりに授業が進んでいって...

ここは今までと同じ... 何も変わっていない...

パパが死んだあの日... 私はここにいて... いつもどおりに授業を受けていて...

なのに... あの日からいろんなことが起きて... 私はまたここにいるけど...

何かがちがう... 前とちがう... まわりのみんなは同じなのに... 私だけちがう...

中休みにトイレに行った。

はあ〜... 学校のトイレが一流ホテルのトイレに思えちゃう。

ドアが開く音がした。

「ねえねえ、知ってる？」

その声は同じクラスの子。

「香山さんの家って破産したんだって」

「知ってる知ってる、お父さんが事故で亡くなったのって本当は自殺じゃないかって」

「ウッソー！」

「なんかさあ、自殺だと保険金おりないけど、事故だとおりるから、
わざと事故ったんだじゃないかって、うちの親が言ってたわよ」
「やだあ、サイテー」

なにそれ... ちがう... パパはそんな人じゃない...

「私ね、見ちゃった」
「なにになに？」
「香山さん、使用人だって言ってたけど、あの男の人とアヤシイかも」
「なんでなんで？」
「朝ね、脇道のところで、香山さん、あの男の人のネクタイ直してたの」
「へえっ」
「ふつうしないよね、使用人のネクタイなんか直さないよねえ」
「まさか、親戚の家にいるんじゃないくて、同棲してるとか？」
「ウッソー！ サイテー！」

朝は... あんなに親しげに私のそばに寄ってきたのに... そんなこと考えてたなんて...

「でも、香山さんが同棲なんて、しないと思うな、気位高いもん」
「そうそう、そんなお下品なことできないわってカンジ？」
「香山さんて、ちょっと高ピーってというか、私はあんたたちとちがうのよってカンジよね」
「旧家のお嬢さまだもんねえ」
「今はちがうでしょ、破産しちゃったんだから」
「悪いけど、ちょっといい気味って思っちゃった」
「私もお」

笑い声... 頭がボーッとして... 吐き気がしてきた...

そんなふうに思われていたなんて... ずっと...
友だちだと思っていたのに...

始業のベルが鳴っても... 私はボーッとトイレの中にいた。

ナニモカンガエタクナイ... ナニモ...

吐き気がして、私はゲーゲー吐いた。
何も出てこないのに、吐き気だけが止まらなくて...

死ニタイ... モウ... 死ンデシマイタイ...

もう授業が始まっている教室に戻ると、みんなが私の方を向いて、
またすぐに黒板の方に向き直った。

「香山さん、、どうしたの？」

英語の先生が怪訝な顔をして私のそばに来た。

「ちょっと... 気分がわるくて...」

「そう、まあ、まだしょうがないわよね、いろいろあったんでしょ？」

「は...い...」

「早退しなさい、担任の先生には私から伝えておいてあげるから」

「はい、すみません」

私はカバンを持って教室を出た。

校門を出て... どこへ行けばいいの...

私にはどこにも行くところがない... 居場所がない...

私の居場所はどこにもない...

死ニタイ... 死ンデシマイタイ... モウ生きテイタクナイ...

バスに乗って、私の家に... 私の家だったところへ向かった。

門に鎖が巻かれて立ち入り禁止の札が下がっている。

おとといまで私はここに住んでいた。

ここは私の家だった。

なのに、今は中に入ることができない。

見上げると、二階の私の部屋の窓のカーテンが閉まっていた。

いつも見ていたカーテン... 私の部屋のカーテン... 私の部屋... 私の部屋だったのに...

ずっとあの部屋にいられたらと思った。

こんなふうに門の外から見上げることしかできなくなるなんて思ってもいなかった。

「あら？ 香山さんのお嬢さま？」

「え？」

あ... とんりの家のお手伝いさん...

「このたびは大変でしたねえ」

いやだ... こんなところで... 知ってる人に会うなんて...

「今はどうしてらっしゃるんですか？ うちの奥様も心配してらっしゃいましたよ」

「あ、あの、失礼します」

私は早足でその場から逃げた。

やだ... きっとみんな笑ってるんだ... 同級生たちみたいに... みんな...

私が不幸になったことを笑ってる...

もうどこにも居場所がない... 家も... 学校も... どこも...

誰にも見られないように下を向いて歩いていた。

どこに行ったらいいのかわからなかったけど、ただ歩いていた。

どこに行ったらいいのかわからなくて、ちょうど止まっていたバスに乗った。

バスの窓から通り過ぎる風景をボーッと見ていた。

このままどこかへ行ってしまうたい...

どこへ？

どこにも...ない...行きたいところも...行けるところも...私の居場所も...

バスが終点の駅前に着いた。

行き止まり...

しかたなくバスを降りた。

にぎやかな街。

平日のこんな時間にここに来たことなんてなかった。

平日のこんな時間なのに人がいっぱい。

楽しそうに歩いてる恋人たち、おしゃべりしながらあるいてるにぎやかなおばさんたち、

人ごみをぬって足早に通り過ぎるサラリーマン風の人、誰かを待って立ってる人、

みんな自分の場所があって、帰る場所があって...

居場所のない心細さなんて感じてもないだろうな...

私は...

どこに行こう...

「ちょっと、あなた」

え？

腕をつかまれていた。

「高校生でしょ？」

「は、はい」

「学校はどうしたの？」

「え... あの... 早退して...」

「それでなんでこんなところにいるの？」

居場所がなくて... そんなこと言ったってわかってくれるわけない...

「ちょっと一緒にいらっしゃい」

これって... もしかして... 補導？ 私、補導されちゃったの？ やだ、どうしよう...

「あ、あの、ちがうんです、私...」

「話はあとでゆっくり聞くからね」

どうしよう... 心臓がドキドキして... 私... なんてことしちゃったんだろう...

交番の奥の部屋。

ビニール張りのソファに座らされて...

婦警さんは、今回だけは学校に報告しないと言ってくれた。

その代わり、あの人の電話番号を言わなくてはいけなくなった。

保護者が引き取りに来ない限り私を帰すことはできないって...

帰るところなんて... 本当はないのに...

「誠光学園っていったら進学高校でしょ、そこの生徒のあなたがこんな時間に
繁華街でブラブラしてるなんて、何かあったの？」

「い...え...あの... バスに乗って...気がついたら終点で...」

すごくみじめで... こんなところに連れてこられて... こんなところにいて...

「あらあら泣かなくていいのよ、犯罪犯したわけじゃないんだから、責めてるんじゃないのよ」

「す...すみません...」

「まあ、あなたぐらいの年頃はいろいろあるんでしょうけど、こんな時間にあんなところを
うろついてたら、どんな犯罪に巻き込まれるかわからないんだからね」

「はい...」

「おにいさん、すぐにここに来るって言ってたから、もう少しここで待ってなさいね」

来る... あの人が... やだ... 恥ずかしい... こんな...こんなところに...

私ったら何やってるんだろう、こんなことになっちゃって、もうイヤ、消えてしまいたい...

「すいませ〜ん！ 香山真理子の兄です！」

あの人の声...！

私は反射的に見えないように壁に身体を寄せた。

あの人と警察の人が何か話してる声がある。

いやだ... 会いたくない... 恥ずかしい...

「お兄さんが来たわよ」

婦警さんが来て、その後ろからあの人が部屋に入ってきた。

汚い作業着に長靴のまま...

仕事中に抜け出してきたんだ...

少し息を切らせて... きっとバス停から走ってきたんだ...

私はあの人の顔を見ることができなくて、また下を向いた。

「もういいわよ、お兄さんと帰りなさい」

婦警さんにそう言われても、立ち上がることができなくて...

「真理子、帰ろう」

あの人の声... そして、油で汚れた手が私の目の前に差し出された。

それでも私は立ち上がることができなくて...

「ほれ、真理子、行くぞ」

あの人が苦笑いしながら私の手をにぎって、私を立たせた。

温かい手が私の手をギュッとにぎった。

「そんじゃ、お世話になりました」

あの人は私の手をにぎったまま、そう言ってペコッと頭を下げた。

バスの中、二人並んで座って、でも、あの人は何も言わなかった。

私も何も言えなかった。

あの人は黙ったまま、ずっと私の手をにぎっていた。

爪の中まで油で真っ黒に汚れた手で。

泣きたいような...恥ずかしくて辛くて...でも...なんだか...ホッとして...

私は手をにぎられたまま、ずっとあの人のとなりに座っていた。

あの人はあぐらをかいて、作業着のポケットから煙草を出して火をつけた。

私は... どうしたらいいのか... 何を言えばいいのか...

できることなら... 逃げ出したい... ううん... 消えてしまいたい...

「なんか、あったんか？」

あの人の声はいつもの声で...

何を言えばいいの... 同級生たちの言葉... 入れなかった私の家... 何を...

「す... すみません...でした... あの... ご迷惑を...おかけして... すみません」

「んじなくてよ」

あの人は苦笑いして言った。

「なんかあったんだろ？ ちがうか？」

「い...え...あの...ただ... 気分が...悪くなって...早退して...それで...」

「今は大丈夫か？ なんなら布団敷いてやっか？」

「いえ...あの...大丈夫...です」

「あのよ、補導されたこと気にしてんなら、んなこと気にすることねえぞ、

俺なんか何回も、いや、何十回もやってんだからよ、

つうか、俺は補導されたっより、とっつかまったんだけどよ、チャリ盗んだりしてよ、

そのたんびに、かあちゃんが迎えにきてサツのおっちゃんにあやまってよ」

あの人はそう言って笑った。

「あの... 本当にすみませんでした...」

「だからよお、あやまんなくていいつつうの、それよか、なんかあったんだろ？ ちがうか？

それとも、ただちょっと遊びに行きたくなかったとか、そういうことか？」

私は... 黙って首をふった...

「あのよ、俺、な〜んも怒ってねえしよ、説教食らわそうとか思ってねえしよ、

ただ、なんかあったんなら言ってほしいんだよ」

「べつに...な...にも...」

「なんもねえって顔してねえじゃん」

あの人はまた苦笑いして...

「俺、アッタマ悪りいし鈍いけどよ、それでもなんかあったってわかるぞ」

私は...

なんだか... だんだん腹がたってきて... そんなのおかしいってわかってるけど...

「だったら... もしも... もしも何かあったら、どうだっていうんですか？」

「どうもこうもねえだろ、心配すんだろ」

「それは... ご心配おかけして申し訳ないと思ってます。

お仕事中だったのに、来ていただいて申し訳ないと思ってます、すみませんでした」

あの人は、黙って私の顔を見て... そしてスクッと立ち上がった。

一瞬叩かれそうな気がして、身をすくめた。

「真理子」

あの人は私の前にしゃがんで、私の両肩をつかんだ。

「言え」

そう言って私の目をジッと見た。

私は...

「言っても... しかたないことですから...」

あの人は私の目を見たままで...

「いいから言え」

「いいんです...もう...」

「あのなあ」

あの人は覗き込むように顔を近づけた。

「俺はよ、仕事ほっぽらかしておまえのこと迎えに行ったんだぞ」

「すみません、本当に... ごめんなさい」

「ちげーよ、あやまれつつってんじゃねえよ」

あの人はそう言う私の頭をクシャクシャとなでた。

「やなことあったんならよ、言ってくれよ、言ってもしゃ〜ねえことでもよ、

言えばスッキリするかしんねえじゃんよ、な？」

「でも... 本当にもう... いいんです...」

「ったく、こいつはよおおっ！」

あの人は突然私を後ろから...

「や、な、なに、やだ、キャハハ、や、やめて、キャー——ハハハ、やめて——！」

「こら！言え！ 言わねえともっとくすぐってやんぞ！」

「や、やだ、バ、バカみたい、こんな、キャーハハ、おねがい、やめて、ハハハ」

「言え～、真理子～、コ～ショコショコショ～」

「や、やめてっ！　言いますっ、言うから、ハハハハ、やめてったらあ！」

「よし、そんじゃ、言え」

あの人は私を後ろから抱きしめたままそう言った。

「手を離してください」

「や～だね、言うまで離さねえよ」

「バ、バカみたい、子どもじゃあるまいし」

「いーから、ほれ、言えって」

ハア～ツ...

「友だ...　同級生が...　いい気味だ...って」

「あん？」

「パパが死んだのは...　事故じゃなくて自殺じゃないかって...」

私は...　擦り切れた畳をボーッと見ながら、ひとりごとみたいにしゃべって...

順序もめちゃくちゃで...　ただ思い出したことを口に出して...

「家に行ったら...　門のところに鎖がしてあって...　入れなくて...　私の家だったのに...

ずっとあそこに...　ずっと私の家だったのに...　もう...　どこにも行くところがなくて...

学校も...　家も...　どこにも...　私の居場所がなくて...

無表情な自分の声を...　他人の声のように聞きながら...

「バスに乗って...　気がついたら終点で...　それで...」

あの人は黙ったままで...

「これで...　全部言いました」

あの人の腕は私を抱いたままで...　今どんな顔しているのかわからなくて...

「あの...」

振り向こうとしたら...

「真理子」

あの人のあごが私の肩にのっかって、頬と頬がくっつきそうなくらいで...

「あきらめろ」

「え？」

「おまえはもう金持ちのお嬢さんじゃねえんだよ」

あの人の言葉が胸にズシンときて...

「今のおまえは貧乏人の家の子なんだよ」

なにが...言いたいのか...

「でもな、俺は貧乏なんてちっとも恥ずかしくねえぞ、まあ、俺は生まれたときから貧乏暮らしだったっつうのもあるけどよ、でもよ、見ろよ」

あの人はそう言って私の身体の前に自分の両手を広げてみせた。

「俺はこの手で働いて食ってんだよ、貧乏だってよ、ちゃんと自分で稼いでんだからよ、なんも恥ずかしいことなんてねえよ」

私は... 油で汚れたあの人の手をジッと見た...

「いいか、ちゃんと覚えとけよ、おまえん家はここだ、このクソ汚ねえアパートのこの部屋だ。そんで、おまえのにいちゃん俺だ、小せえ工場で働いてる男がおまえのにいちゃんだ。ここがおまえの家なんだよ、俺とおまえと兄妹二人で暮らしてく家なんだからよ、何があっても、ここに帰ってこなきゃダメだぞ。おまえが帰ってこなきゃ、おれはまた仕事ほっぽらかして探しに走んなきゃなんねえんだぞ。どこに行ったって、俺はぜってえおまえのこと連れて帰ってくるかな。ったりめえだろ、おまえは俺の妹なんだぞ、心配で仕事なんかしてられっかよ、わかったか」

目の前にかざされたあの人の手が...油で汚れた手がにじんで見えない...

「真理子、わかったら返事しろよ」

あの人はそう言って私の頭をチョンとつついた。

「は...い...」

「はいじゃねえよ、うん、にいちゃんわかったよって言え！ 言わねえとまたくすぐるぞ」
あの人はふざけた口調でそう言った。

「私は...」

声が震えて...

「ここに...いて...もいいんですか...」

「バ～カ、ったりめえだろ、おまえん家だぞ」
あの人はそう言って後ろから私の頭を優しくなでた。

「もうあきらめて、俺の妹になれよ、な」

涙がとまらなくて...
くちびるかんでも... とまらなくて...

「ほれ、こっち向け」
あの人が私の身体をクルッと自分の方に向けた。
「泣くときはにいちゃんのここで泣けつつたろ」
そう言って汚い作業着の胸を指さして、そして、泣いてる私をフワッと抱きしめた。
「もうどこにも行くな、バ～カ！ 居場所がねえなんて言うな。
汚くてボロくてもな、ガマンしろ、ここが俺たちの家なんだからよ」

あの人の腕の中は... 油と煙草と汗のにおいがした...

だけど... とっても大きくて... 広くて... 暖かくて...

私はずっと顔をうずめていた。

工場

次の日の朝になって、起きたけど...

学校に行きたくない...

友だちみたいな顔をして裏であんなことを言っていた人たち...

どんな顔して会えばいいの... 平気な顔なんてできない...

「真理子、どした？」

グズグズとなかなか布団から出ない私に、あの人が声をかけた。

「具合でも悪りいんか？」

「あ、いえ、なんでも...ないです」

布団から起き上がって、顔洗って... ハア〜... 着替えなきゃ...

制服を出そうとタンスに手をかけたけど...

「おっ、そっか、着替えるんだよな」

あの人が立ち上がって部屋から出ていこうとした。

「あっ、あの...」

「ン？」

振り向いたあの人の顔を見たまま... 何も言えなくて...

「どした？」

「え...あの...いえ...なんでも...ないです...」

友だちに会いたくないから学校休みたいなんて... そんな子どもみたいなこと...

「真理子」

あの人が私の顔を覗き込んだから、思わず視線をそらした。

「あ〜、あるな、ぜってえなんかあるな」

あの人はそう言って笑いながら、私の顔を両手ではさんだ。

「なんだよ、言えよ、何言ってもにいちゃん怒らねえぞ、な」

「い...いき...たく...な...い」

「あ？」

あの人が私の口元に耳を近づけた。

「行きたく...ないん...です」

「学校か？」

私はコクンとうなずいた。

「具合悪りいんか？」

私は首を横にふった。

「おっし、そんじゃ今日は休みだ！ な！」

あの人はそう言って微笑んだ。

なんだかホッとして、なんだかスウーッと気が楽になった。

「でもなあ、一ン日中ここに一人でいて退屈しねえか？」

「あ... 勉強してますから...」

「なんだよなあ、せ〜っかく学校休むつつうのに勉強なんかすんのかよお」

あの人はそう言って笑った。

「俺なんかしょっちゅう学校サボって遊び歩いてたけどな、そんでとつつかまってよ、ハハハ」

こんなに簡単にゆるしてもらえるなんて思わなかった。

ただ行きたくないって理由で休めるなんて...。

「なあ、だったらよ、俺の工場に来ねえか？」

「え？」

「ただの工場だけどよ、ここに一人でいるよかヒマつぶしにはなっからよ」

「でも... 私なんかが行っていいんですか？」

「おう、小せえ工場だからよ、たまに仲間の奥さんがガキ連れてきたりすんだよ」

「はあ...」

「事務のおばちゃんとしゃべってりゃいいじゃん、事務のおばちゃんつつても
いちおう社長の奥さんだけどな、ハハハ」

工場なんてどういうところなのか、ぜんぜん想像できない...

でも... この薄暗い部屋にずっといるよりはいいかも...

「はい、あの、行きます」

「おっしゃ！ そんじゃ、メシ食っていくか！」

あの人はそう言ってニッコリ笑った。

学校に行くバスとは反対側のバスに乗って20分。
降りたところは、汚いプレハブや古い倉庫みたいな建物が並んでいた。

あの人が慣れた足取りで路地の中をどんどん入っていくから、
おいていかれそう思わずシャツの後ろにつかまってしまった。
「アハハ、子どもみてえだなあ」
あの人はそう言って笑うけど、こんなところで迷ったら出られなくなりそうなんだもの。

「ここだよ」
あの人が指差したのは、『サカイ工業』ってペンキの文字がはげかけた古い建物。
工場っていうから、もっと大きいのかと思ってた。
錆びたシャッターの横の小さな戸を開けて、「入れよ」っていうけど、
私はあの人のシャツのすそを持ったまま、あの人が入る後ろについていった。

「おう、ノブ」
暗闇の中から声がした。
「うい〜っス」
あの人が返事しながら、ガラガラガラッとシャッターをあげた。
外の光が入ってきて少しは明るくなったけど、奥の方はまだ薄暗い。
「なんだ、ノブ、カノジョ連れてきたのか」
さっきの声は年配のちょっと頭のハゲたおじさんだった。
「ちげえっスよ、妹っスよ」
「おお、例の妹さんかよ」
「真理子、社長だよ」
えっ!? この人が社長?
「は、はじめまして」
「いやあ、よく来たねえ、ノブもまたこんな汚ねえところに連れてこなくてもよ、ハッハッハ」
作業服着てサンダル履いてるから従業員の人かと思ってた…。
「今日、学校休みなんで連れてきたんスよ、いいっスかね？」
「ああ、うちのかあちゃんのおしゃべりの相手でもしてやってくれや、ハハハハ」
「ういっス、真理子、こっち来い」
あの人はそう言って私の手を引っ張って奥の方に進んでいった。

小さな部屋の中には机がふたつ。
これが事務所？

「奥さん、これ、俺の妹、真理子」

「あらあ、まあまあまあ、ノブちゃんがいつも言ってたあの妹さんかい、まあまあ」
コロんと太ったおばさんがニコニコしながら私を見た。

「あらあ、ベッピンさんだねえ」

「だろ？」

「よかったねえ、おにいさんに似ないでさ！ アッハハハ」

思わずあの人の顔をチラッと見ると、あの人も私を見て苦笑いしてた。
このおばさんは私とこの人が血のつながった兄妹だと思っているのかな。

「今日は仕事終わるまで置いてやってくんねえかな」

「ああいいよ、何か手伝ってもらおうかね」

「あ、は、はい」

「そんな緊張することないよお、三時のお茶入れてもらおうとかさ、そんなくらいだからさ」

「はい」

「真理子、そんじゃ俺仕事すっからな」

「あ、はい」

あの人が事務所から出ていくと、なんだか心細くなって...

「え〜と、真理子ちゃんだっけ？」

「はい」

「ほらあ、そこに座ってのんびりしてていいんだよ」

「ありがとうございます」

事務机の前の椅子に座ると、事務所の窓から工場の中が見えた。

「そうだ、ちょっと手伝ってもらおうかね」

「は、はい」

で、できるかな... 事務の仕事なんてしたことないのに...

「この伝票をさ、このファイルに日付順にはさんで閉じてくれるかい？」

おばさんはそう言って、伝票の束と黒いファイルと黒い紐を私の前に置いた。

これなら...できるかも...。

「ノブちゃんさあ」

「え？」

「あんたのにいさんさあ」

「あ、は、はい」

「妹と住めるようになるんだって、大喜びしてたんだよ」

私は伝票の日付を確認しながら、おばさんの話を聞いていた。

「中学卒業してすぐにうちに来てさ、これからやっとかあちゃんに楽させてやれるって」

おばさんがグスッと鼻をすすった。

「そう言ってた矢先に死んじゃっただろ？ もうそんときのノブちゃんは見られなかったねえ」

おばさんの声がどんどん涙声になっていった。

「笑わないんだよ、ただ黙々と仕事だけしてさあ、仲間が飲み誘っても行かないしね。

私ら、どうしてあげることもできなくてさあ、あのときは辛かったねえ」

おばさんはそこまで言うと、ビーッと鼻をかんだ。

「それでもまあ、少しずつ明るくなってはきたけどね、だけど、ほら！

あんたと一緒に住むってことになったときには、もう大喜びでね、

毎日毎日、やっとなと一緒に暮らせるんだって、耳にタコだったよ、ハハハハ」

そんなに... 喜んでたの...

「前にね、え〜と、いつだったっけかねえ、あ、そうそう、おととしの忘年会だわ。

そんとき、ノブちゃん酔っ払ってべらべらしゃべってたんだけどさあ、

ほれ、父さんが死んじゃったときにさ、ほんとなら施設に入れられるところを

かあちゃんが『この子は私の子だから私が育てます』って手元においてくれたって、

『縁があって親子になったんだから、あんたは本当の私の息子だよ』って言ってくれたって」
おばさんはまたビーッと鼻をかんだ。

「たいしたもんだよねえ、女一人生きてくのだって大変だったのにさあ、

血のつながらない子を引き取って育てたんだもんねえ、なかなかできないよ」

なぜだろう... 私の本当のママのことなのに... いつも他人事みたいに聞こえて...

ううん... それよりもっと... なんか... ちょっとイヤな気持ちになる...

赤ちゃんのときに別れちゃったから？ ぜんぜん憶えてないから？

それとも... 私とは一緒に暮らしてくれなかったから？

バカみたい、しかたなかったことじゃない、わかってるじゃない、でも...

他の人が知っているママを私だけが知らない...

私はおばさんの話が聞こえてないように伝票をそろえていった。

「そろそろ昼だねえ」

おばさんの声でハッと我にかえった。

私ったら伝票の整理に夢中になってた。

目の前には整理したファイルが5つ。

「あらあ、もうそんなにできたのかい？ 仕事が早いねえ」

おばさんがニコニコして言った。

なんだか嬉しい、子どもにでもできそうなことだけど、なんかちょっとだけ仕事した気分。

「真理子ちゃん、昼ごはんはどうするんだい？」

「え？ あ... さ、さあ...」

「ノブちゃんに聞いておいでよ」

「え？ でも、まだ工作中じゃ...」

「いいよいよ、ちょっと行って聞くだけなんだからさ」

「は...はい...」

「それに、おにいちゃんの働いてるところ見ておいで」

おばさんはそう言ってニッコリ笑った。

事務室を出て、工場の中に入ると、キーーンとかグォーオーンとかすごい音。

金属と機械油のにおいがする。

いちばん奥の機械のところにいて、おばさんが言ってたから、

私は中央の通路を両側から聞こえる機械音に圧倒されながらおそるおそる奥へと進んだ。

あ、いた。

あの人は油と汗で汚れた作業着で何かの機械を動かしていた。

真剣な顔...

汗がぽたぽた額から落ちている...

なんだか...

なんだか... 働いてる...って... 働くって... こういうことなんだ...

パパだって働いてたけど、仕事しているところを見たことはない。

だから、働くって、仕事するって、言葉でしかわかってなかった気がする。

でも...

あの人が汗びっしょりになって、機械油にまみれて、真剣な顔で働いてる姿は...

本当に「働いてる」ってカンジで...

汚い作業着着てるのに、顔が汗と機械油で汚れてるのに...

なんだか... なんだかとっても... とっても...

「あ？ 真理子？」

ドキッ

え・・・？ なんでドキッとしたの・・・？

「どした？」

「え... あの... お、奥さんが... お昼はどうするのか聞いてきなさいって...」

「真理子ラーメン好きか？」

「え... あ... は、はい」

「ほんじゃラーメンだな」

汗と油まみれの顔でニコッと笑った。

工場の近くの汚いラーメン屋。

あの人はラーメンライスの大盛りとギョウザを注文して、私はふつうのラーメン。

ラーメンライスって、ラーメンとごはんなのね。

それって炭水化物と炭水化物の組み合わせでしょ？ しかも、どっちもすごい量！

でも、あれだけ汗流して働いてたらお腹空くのもわかる気がする。

「真理子、ギョウザ食べよ」

「え... い、いいです」

「食ってみろって、ここのうめえんだぞ」

あの人はそう言って私とあの人の間にギョウザのお皿を置いて、
自分が使っていたギョウザのタレの入った小皿を私の前に置いた。

ギョウザってニンニクくさくなるからイヤなんだけど...

「いただきます」

食べろって言うから、ひとつだけ。

あの人が使ってるお皿のタレにつけてパクッ。

「あ...」

サクッとしてジュワッとして...

「な？ うめえだろ」

コクンとうなずくと、あの人は満足そうに微笑んだ。

顔に油の汚れがついてるけど、なんだか汚いとは思えなかった。

三時になって、「みんなにお茶持ってってくれるかい？」と奥さんに言われて、
お茶と山盛りのお菓子の入った器の載ったお盆を持って、ロッカールームに行った。

ドアを開けると煙草と油と汗となんかいろんな匂いがムワッと充満していて、
なんか... 中に入るのがちょっと怖くて...

「おう！ 真理子！」

あの人が私を見つけて...

「あ...あの... お茶を...」

お盆を持った手だけドアの中に差し出して...

「真理子、こっち来いよ」

って、あの人が言うから、おそろおそろ中に入って...

みんながこっち見てる視線だけピンピン感じるけど、顔をあげられない...

「ノブ、だれだれ？ おまえのコレ？」

「ちげーよ、俺の妹だよ」

「あーっ、ノブがいつでも言ってたあれかよ！」

「マジかよ、すんげえ可愛いじゃん！」

「だろ？ 俺の妹だもんよ」

「オメーにはぜんぜん似てねえよ！」

「うっせえな！」

「名前なんちゅうの？」

「真理子だよ」

「ノブに聞いてねえっちゅうの！」

私は... 下を向いたまま...

「あ...あの...お茶...」

「おう、サンキュ」

あの人がお盆を受け取って...

すぐに外に出ようとしたら、

「真理子、ここに座れ」

えっ...

あの人が自分のとなりの椅子を指さしてる。

私はこわごわ、あの人と同じ汚れた作業着に汚れた顔の人たちの中に座った。

「みんな、これが俺の妹の真理子、よろしくな」

そう言って私の肩に手をまわしてグイッと抱き寄せた。

「よ、よろしくお願いします」

お辞儀してすぐに立とうとしたけど、あの人が肩に手を回したままで... 立てない....

「おお！ ノブの妹に拍手〜！」

誰かがそう言うと、そこにいた全員が「オーー！」と歓声をあげながら拍手した。

な、なんで拍手なの？ 顔が真っ赤になってるのがわかる...

は、早くここから出たい...

「真理子ちゃん、マジ可愛いなあ」

「なあなあ、カレシいの？」

え...

「今度さあ、俺とデートしねえ？」

「俺だよ俺、俺とデートしよ、なななな」

な... なにこれ... どうしたらいいの...

「オメーら、俺の妹に手え出したら承知しねえかな！」

ホッ とした... あの人の声で...

「はいはいはい、ノブは妹が可愛くってしゃあねんだもんなあ」

「だよなあ、妹の話ば〜っかしてんだもんな」

え？

「う、うっせえな！ オメーら、さっさと仕事しろよ！」

「休憩中だっつうの、てかよ、赤くなってんぞ、ノブ」

「な、なってねよ、バカ！」

や...やだ... 聞ってる私の方が耳まで熱くなっちゃって...

「でもなあ、こんな可愛いんならよ、そりゃ自慢したくなるよなあ」

いたたまれない...って言葉は、こういうことなんだと思う...

「でさ、真理子ちゃん、俺とデートしよ！」

えっ!? ま、また、それ？

「オメー！」

あの人の声がすると...

「ジョ〜ダンだっつうの、俺まだ死にたくねえもんよ」

「わかってりゃいいんだよ」

ホッとする...

「でもよ、よかったな、ノブ」

「だよなあ、やっと一緒に住めてよ」

え...

「お、おう」

照れたような声で...

やっと？

「おまえたち、とっくに休憩時間過ぎてるぞ！」

社長...さんがドアから顔を出した。

「うい〜っス」

「あ〜あ、つとに、こき使うよなあ」

「ヤス、今月の給料無しだ！」

「えええ、カンベンしてくれよお、社長」

社長さんが笑いながら、ゾロゾロ出ていくひとりずつのお尻ポンって叩いて、私の顔を見てにっこりして出ていった。

ホ〜ッ...

なんか... あ〜緊張したあ。

みんなが飲んだお茶碗やお菓子の袋をお盆に載せて...

「真理子」

顔をあげると、あの人が優しい目で私を見ていた。

「はい？」

「なんでもねえ」

そう言ってポリポリ頭をかいて出ていった。

おにいちゃん

「さてと、そろそろ終わりだね」

おばさんの声に顔をあげて壁の時計を見ると、もうすぐ5時半。

「真理子ちゃんのおかげで、たまってた仕事が全部かたづいたよ」

おばさんはニコニコ笑って言った。

「手早いねえ、ほんとにさ、助かったよ」

私がやったことなんて単純な作業ばかりだったけれど、そう言ってもらえると嬉しかった。

「ノブちゃんたちも、もうすぐ上がってくるからここで待っていで」

「はい」

おばさんが事務室から出て行って、私は一人事務室の窓から工場の中を見ていた。

機械音がやんで、一人また一人と事務室の前を通り過ぎてロッカールームに入っていく。

あ、あの人だ。

あの方が事務室の窓に顔を近づけてニコッと笑った。

なんだか... それが... ホッとして... なんだか... ちょっと嬉しくて...

机の上を片づけた。

「真理子、行くぞ」

作業着を脱いできたあの方が事務室のドアから顔を出した。

「はい」

私は急いで事務室を出た。

シャッターは閉められていて、朝入ってきた戸からみんなが出ていった。

「お疲れ〜っス」

「真理子ちゃ〜ん、今度デートしようねえ」

「ダ〜メだっつうの！」

あの方がパソコンと頭を叩いた。

「イデッ」

「オメー、バッカじゃねえの、ノブの妹に手え出したらマジぶっ殺されっぞ」
他の人がそう言って笑った。

この人たちに『ノブの妹』って言われてると...
なんだか少し...あの人の妹って...そんな気になってくる...

「ノブ」

後ろから声がして振り向くと、社長と奥さんが立っていた。

「社長、今日は妹が世話になりました」

あの人がペコッと頭を下げたから、私も一緒に頭を下げた。

「いやいやあ、うちのかあちゃんは真理子ちゃんが来てくれて助かったつつってたぞ」

「そうスカ」

あの人が嬉しそうに笑った。

「これ、少ないが」

社長が私に茶封筒を差し出した。

「今日のバイト代だ」

「え？」

「いやあ、社長、とんでもないっスよ、今日はこっちが世話んなっちまったんスから」

「いやいや、かあちゃんがいろいろ仕事させたみたいだよ」

「そうなんだよお、真理子ちゃん手早くてさあ、助かっちまったよ」

奥さんがそう言って笑った。

「なあに、菓子代くれえしか入ってねえから、駄賃だと思って受け取れや」

「そうスカ？ すいません」

あの人がそう言って頭を下げた。

「真理子、そんじゃもらっとけ」

「え、あ、は、はい」

私は茶封筒を受け取って、

「ありがとうございます」

社長と奥さんに頭を下げた。

「真理子ちゃん、また来ておくれよ」

「ありがとうございます」

「そんじゃ、お疲れ〜っス」

あの人は社長たちにペコッと頭を下げて、私の手をにぎって外に出た。

ボタンと戸を閉めた途端、

「真理子、よかったな」

あの人がそう言って私の頭をクシャクシャとなでた。

「私... 生まれて初めて... バイト代なんてもらいました」

「バイトしたことねえのか？」

「ないです」

「あ〜、ねえか、だよなあ」

あの人はそう言って笑った。

私は薄い茶封筒をギュッと胸に抱きしめた。

夕暮れの中を走るバス。

私はあの人の横顔を見ていた。

まだ少し機械油の汚れがついてる顔... だけど...

「どした？」

あの人が私の視線に気づいてこっちを向いた。

「い、いえ」

「疲れたろ」

いいえって言おうとしたら、あの人が私の頭をグイッと自分の肩に乗せた。

そして、大きな手で私の頭を優しくなでて...

油と汗のにおい... でも... イヤじゃない... なんだかホッとして...

私はゆっくりまぶたを閉じた。

あの人がチャーハンを作って、私は洗い物をすることにした。

「いいんだぞ、あとで俺やっからよ」

「あの、私、料理はできないけど、洗い物くらいはできますから」

だって、あんなに一生懸命働いた後で、ごはん作って洗い物までするなんて大変なもの。

食べ終わって、私のあの人の前で社長がくれた茶封筒を開けた。

千円札が二枚入っていた。

「社長、フンパツしたなあ」

あの人はそう言って笑った。

初めて働いてもらったお金。

あれで働いたって言えるのかわからないけど、
パパからのお小遣いじゃなくて、いちう私が働いてもらったお金。
ちょっと... 感動。

そうだ...！

あの人の前に茶封筒を置いた。

「どした？」

「あの... これ... 少ないですけど... 生活費に入れてください」

あの人は一瞬「ハ？」って顔をして、それからニコッと笑って茶封筒を私の方に押し返した。

「これは真理子が働いて稼いだ金なんだからよ、真理子の小遣いにしろ」

「でも...」

「真理子、なんも心配すんなつつたろ、金のことはにいちゃんがちゃんとやるからよ」

「そ、それは、わかってます、けど、私、あの、居候はイヤなんです」

「いつ俺がおまえのこと居候だなんて言ったよ？ んなこと思ってねえよ」

「い、いえ、そうじゃなくて、あの...」

私はフーッと息を大きく吐いて...

「わ、私が、あ、あなたの、その、い、いも...」

ドキドキする...

「い、妹...」

い、言えた...

「あの、い、妹なら、少しは、手伝いたいなって」

あの人がちょっと驚い目で見えるから、あわてて下向いて...

「あの、一緒に生活するって、あの、お世話になるだけじゃダメだと、思うんです、私も、ちょっとだけでも、ちょっとしかできないけど、何かしたいなって、思って、私、何もできないですけど、できることがあったら、やりたいって、そうしないと、それは、あの、ただの居候で、か、家族...じゃ...ないんじゃないかって...」

私は恥ずかしくて、ずっと下を向いたまましゃべった。

あの人がどんな顔して聞いていたのかわからない、でも、言いたかった、今日は...。

「真理子」

「は、はい」

「サンキューな」

顔を上げると、あの人が優しい目で私を見ていた。

「そんじゃ、1,000円はもらうぞ、あとの1,000円は小遣いにしろ、いいな」

「あ... はい」

あの人は茶封筒から千円札を一枚抜き取って、

「真理子がはじめて稼いだ金だもんな」

そう言って大切そうに小さく折りたたんで財布に入れた。

私は千円札を茶封筒に入れたまま、カバンの中にしまった。

私がはじめて働いて、はじめてもらったお金... 大切に取っておこう。

お風呂から帰ってきて、お布団を敷いて、電気を消して寝た。

擦り切れて薄くなっているカーテンから漏れる街灯の光で、

向こう側を向いて寝ているあの人が見える。

もう寝ているのかな？ 寝てるよね、あんなに汗だくで働いてきたんだもの。

不思議... 昨日までどうしても他人としか思えなかったのに...

なんだか今日は... 本当におにいちゃんのような気がしてきて... 私は...

「おにいちゃん」

小さな声でささやいてみた。

「どした？」

えっ!?

や、やだ、起きてたの？

キャーーーー！！

すっごく恥ずかしくて、クルッと背中を向けて布団をかぶった。

「真理子」

「な、な、なんでもないです」

大きな手が布団から出ていた私の頭をクシャクシャとなでた。

「ありがとな」

布団をこわごわ目まで下げて見ると、あの人が肩肘ついて私を見ていた。

「すげえ嬉しかった」

そう言って微笑むと、また枕に頭をつけて目をつぶった。

私は...

「お...やすみなさい」

あの人が、おにいちゃんが、片手を私の方に伸ばして私の手をにぎった。

「おやすみ、真理子」

私と... おにいちゃんは... 手をつないだまま眠った。

あの人と暮らすようになって一ヵ月が過ぎた。

私は少しずつあの人に甘えられるようになっていた。
だって、あの人がグイグイ私を甘えさせるんだもの。

あの人は、私をまるで小さな妹みたいに扱う。
「危ねえぞ」って、外を歩くときは必ず手をつなぐ。
家にいるときは、あの人が後ろから抱っこするように私の身体に腕をまわして、
あの人に寄りかかって一緒にテレビを見たり、
あぐらかいて座ってるあの人のひざを枕にして本を読んで、そのまま寝ちゃったり...

最初はちょっと恥ずかしかったけど、今はそうするのが嬉しくて...なんかホッとする。

こんなふうに誰かにペタッとくっついていたことってなかった。
パパはいつも忙しくていなかったし、パパの奥さんになんかそんなことする気にもならないし、
佐島さんは優しくかったけど、そういうことしたいと思ったことなかったし。

私の中で『あの人』は、どんどん『おにいちゃん』になっていってる。
なんだか本当のおにいちゃんみたいに思えてきて...

学校では...

今まで友だちだった人たちはみんな離れていった。
裏でひそひそ私のことを言ってるのも知ってる。
いつも一緒にお弁当を食べていたけど、今は私一人中庭のベンチに座って、
あの人が作ってくれたおにぎりを食べている。
大きくていびつで海苔で真っ黒のおにぎりだけど、おいしい。
私はもう『旧家のお金持ちのお嬢さま』じゃないんだもの。
今の私は貧乏で工場で働いてるおにいちゃんの妹。
それをみじめだとか恥ずかしいとは思わなくなった。
きっとそれは...
あの人が、「貧乏が恥ずかしいなんて思わねえぞ」って言ったから。
あの人が工場で油と汗にまみれて一生懸命働いているのを知ったから。
だからいいの、友だちがみんないなくなっても、私にはあの人が、おにいちゃんがいる。

学校から帰って、薄暗い部屋の電気をつけて、制服からふつうの服に着替えて、カバンの中から宿題のプリントと、学活のときに渡ったプリントを出した。

『三者面談のお知らせ』

進路について、先生と生徒と親とが話し合う日。

私の順番はあさっての5時。

ムリだよ、あの人は、おにいちゃんはまだ仕事してる時間だし、それに...

あ、洗濯物がたまってたんだ。

料理のできない私は、洗濯係になることにした。

少しでも自分ができることはしたいから。

洗濯物の入った袋と、手さげカバンに宿題のプリントと筆記用具を入れて、コインランドリーに走った。

洗濯機が回っている間、私はベンチに座りながら宿題のプリントをする。

最初は洗濯機や乾燥機の音がうるさくて宿題なんてできなかったけど、今は平気。

進路...か...

もう大学には行けない。

そんなお金はないし。

だったら、就職？ どこに？

今、高卒で就職できるところってあるの？

それより私は就職できるの？ なんにも資格や特技もないのに？

就職したら... そのときは...

あの人の、おにいちゃんのところから出ていかないと... ダメ...だよ...

就職したら、いつまでも世話になってるわけにいかないもの...

いくら、おにいちゃんと妹っていっても、本当の兄妹じゃないんだもの...

そしたら私は... またひとりになる...

乾燥機の中で、ガラنگランと音を立てて回る洗濯物を見ながら...
また一人になることの心細さと先が見えない不安も頭の中で廻っている。

部屋に戻ると、あの人が帰ってきていた。

「おにいちゃん、おかえりなさい」
「おう、なんだ、洗濯しに行ってたんか？」
「うん」
「もう少しでメシできっからな」
「今日はなあに？」
「へへへ、大フンパツの牛丼だっぜ〜」
「へえ、すご〜い、どうしたの？」
「ジャジャーン！ 今日給料日でしたあ！」
「やだ、おにいちゃん、おたま振り回さないでよ、汁が飛んでるじゃない」
「あ、いけね」

私は袋からバサバサッと洗濯物を出してたたみ始めた。
最初はね、あの人のパンツをたたむのって抵抗あったけど、今は平気。

「真理子」
「なあに？」
「おまえ、それ」
あの人がテーブルの上のプリントを指差した。
「三者なんとかつつうの、あんだろ？」
「あ... うん... でも、いいの」
「いいのって、どういう意味だよ？」
「おにいちゃん、仕事あるし、それに...」
「仕事なんて抜け出してくつつうの、あれだろ、おまえの進路の話だろ？」
「そう...だけど」
「そんじゃ、大事な話じゃんよ、にいちゃんぜってえ行くからよ、先生にそう言っとけよ」
「え... うん...」

私はたたみ終わった洗濯物をタンスの中にしまった。

プシュッと缶ビールのふたを開けて、ゴクゴクゴクッといっきに飲んで、
「あー、うめえ！」と、あの人は満足そうに言った。

「真理子、おまえも飲んでみっか？」

「なに言ってるの、私、未成年なんだから」

「んな硬てえこと言うなよ、俺なんて中坊んときから酒飲んでたぞ」

「それは不良だったからでしょ」

「あっちゃー、痛てえとこ突くなあ、おまえは」

あの人はそう言って笑った。

「俺な、いっちゃん最初に給料もらったときに決めたんだ、安月給だからよ、

毎日晚酌なんてできねえけどよ、給料日にはぜってえ一本は酒飲むぞ！てよ」

あの人はそう言って、またビールをゴクッと飲んだ。

「なんつうの、一ヵ月働いた俺への褒美っちゅうの？ なんちってな、ハハハ」

パパのホームバーの棚の中にはいろんなお酒があったけど、

こうして一緒にごはんを食べたことなんてなかったし、

こんなに嬉しそうにお酒を飲んでる姿は見たことなかった。

いつでも高いお酒を飲めていたパパより、もしかしたらこの人の方がシアワセかもしれない。

「そんでよ、真理子、おまえ進路はもう決めたんか？」

「え... ん... いちおう... 就職...」

「どこに？」

「それは... まだ...」

「なんかやりてえことあんのか？」

「べつに... ただ... 一人で生活していけるだけのお給料がもらえればいいかなあって」

「一人で？」

「うん」

「なんだよ、おまえ、就職したらここ出てくつもりか？」

「だって、いつまでもお世話になってるわけにはいかないし...」

あの人はビールをグビッと飲んで、ドンとテーブルの上に置いた。

「真理子、俺はお世話してるつもりなんてねえぞ」

「え？」

「俺とお前は兄妹だろが！ そんで一緒に暮らしてんじゃんよ」

「でも...」

「そりゃたしかに貧乏暮らしでよ、おまえはイヤかもしんねえけどよ」

「イヤだなんて思っていない！」

「マジ？」

「思っていない、そんなこと... ただ... このまま、ずっとここにいたら迷惑なんじゃないかって」

「迷惑なわけねえだろ！ バ～カ！」

「ほんと...に？」

「ったりめえだろ！ ずっとここにいる！」

「ずっと？」

「あ、や、ま、まあ、嫁に行くまで...か」

「もし、お嫁に行かなかったら？」

「そしたら、ここにいりゃあいいじゃんよ！」

「でも、そしたら、おにいちゃんが結婚するとき、やっぱり私がいたら...」

「俺はおまえが嫁に行くまでは結婚しねえよ」

「そんなのヘンでしょ？ 年の順からいったら、おにいちゃんが先じゃない」

「んなこと関係ねえよ、俺はおまえを嫁に出すまでは結婚しねえかな！」

「おにいちゃん、酔っ払ってるからそんなこと言ってるんでしょ」

「酔ってねえつつうの、バカ！ こんな缶ビール一本で酔うかよ！」

「それじゃ... 私... もし、就職しても、ここにいてもいいの？」

「ったりめえだっつってっだろ！ どこにも行くな、バ～カ！」

「ありがとう」

「なに礼なんか言ってんだ、バカ、妹がアニキと一緒に暮らすのはあたりめえだろがよ」

私は... 嬉しくて...

あの人が何回もバカって言うのが嬉しくて...

もう一人にならなくてもいいんだ... ずっとこの人と暮らせるんだ...

「おっ、そうだ！ 真理子、今月の小遣い」

あの人はそう言って茶封筒の中から千円札を三枚出して私の前に置いた。

「バス代とかそういうのは別だぞ、これは純粋におまえの小遣いだかな」

私は... 目の前の千円札を見たまま...

「お、おい、なんで泣くんだよ、少ねえか？ あ、あのな、ボーナス出たら、
も少し多くやれっからよ、それまでガマンしてくれよ」

「ううん... ちが...う... ヒック なんか... 嬉しくて...」

「あ？」

「おにいちゃんが... ヒック 一生懸命働いたお金だと思うと... 嬉しくて...」

「バ、バカ、んなことで泣くなよ、たっくよお」

あの人はそう言って苦笑いした。

一ヵ月前は、この人とこんなボロアパートの一部屋で暮らすなんてイヤだったのに、今はこうして二人でいるとホッとする。

これからも、こうして二人でいられる... たとえ、私が就職しても...

将来の夢

もう5時過ぎてる。

今日は三者面談の日だって知ってるはずなのに、どうしたんだろう。

「香山、保護者の人は来るんだよな？」

「は、はい」

今朝、あの人はちゃんと言ってた。

「今日だよな、そうすると、やっぱこういうときはスーツで行った方がいいよな」
そう言って、いつもの一張羅のスーツ持って工場に行ったのに... どうしたんだろう？

「しかたないなあ、次も待ってることだし、先に始めるか」

「え... は、はい」

そのとき、廊下からバタバタバタッと走る音がして、ガラッと戸が開いた。

「すみません！ 遅くなっちゃって！」

あの人が、いつもよりももっと真っ黒に汚れた作業着着て、油まみれの顔で立っていた。

「あ、ど、どうぞ」

先生はポカンとした顔で、あの人に座るように手でうながした。

「すみませんねえ、ちょっとトラブっちまって」

あの人は頭を掻きながら椅子に座った。

「どうしたの？」

私は小さな声で聞いた。

「それがよ、機械がトラブっちまってよ、なんせボロだからよ、動かなくなっちゃって、
それ直してたら遅くなっちゃってよ、そのまますっ飛んできたんだけどよ」

「そろそろ始めていいですか？」

先生がちょっと困ったようにそう言った。

「あ、すみません、お願いします」

あの人がペコッと頭を下げた。

「え...と、香山さんは4月に出してもらった進路希望は...」

先生が書類をめくって...

「アメリカの大学に留学ということだったんだよな」

「は...はい...」

あの人が驚いた顔で私を見た。

「三月に受けたTOEFLも正規入学の規定点数は超えてるということだが...」

「あ...あの... 留学は... もう... しません」

「そうか、まあ、そうだな、香山のところはいろいろとあったもんな」

先生はそう言いながらチラッとあの人の方を見た。

「そうなるか...」

「あ、ちょいすいません、その留学つつうのは、かなり金かかるんスかね？」

あの人が身を乗り出した。

「お、おにいちゃん、それはもういいの」

私はあの人の作業着をつまんで引っ張った。

「そうですね、香山の場合、私費留学ということでしたし、提出してもらった資料によると、向こうでも有名な私立らしいですから、入学金・授業料、それに生活費も入れるとかなりかかるでしょうね」

「そう...スか」

「あ、あの、先生、私、就職希望に変更したいんです」

「就職か... うん、まあ、それはしかたないだろうけど...」

先生が渋い顔をして、資料をパラパラとめくった。

「今、高卒の就職はかなりむずかしいぞ、大卒でも就職できない時代だからなあ」

「あの、なんでもいいんです、私ができそうな仕事なら...」

「そういうけどな、たとえばこれが工業高校や商業高校ならまだ就職口はあるんだよ、今は即戦力になる人材が求められてるからなあ、うちの高校は進学高校だから、逆にむずかしいんだ、求人もほとんど来てないのが現状でな」

なんだか目の前にドーンッと大きくて厚い壁が立ちはだかったような気分で...

「あのっスね、たとえば、日本の大学でこいつが行けそうなのってあるんスかね？」

ハ？

「ぶっちゃけて言うと、うちは金がないんスよ、
それでもなんとか行けるような大学つつうのはあるもんスかね？」

なんで突然“大学”なんて言い出したの？

先生はちょっと困った顔をして、

「そうですねえ、成績から言うといくらでもありますよ、まあ、授業料などに関していえば、国公立は私立にくらべて安いですが、ただ、香山は理数系が弱い、
国公立は理数の試験もありますからねえ、受けるとなるとそうとうがんばらないと」

「おい、真理子、がんばれよ」

「な、なに言ってるの？ 私、大学行くつもりないから」

「やっぱよ、大学行っという方がいいぞ、おまえ頭いいんだしょ」

「私は就職するって決めたの」

「すみませんが」

先生が口をはさんだ。

「そろそろ次の人の時間になるですよ」

「あ、すいません、先生、こいつ、進学つつうことをお願いします」

「おにいちゃん！ 私は就職するからね！」

「香山、とにかくもう一度相談してきなさい、期末の後に二者面談があるから」

「は、はい」

私とあの人は教室を出た。

バスの中、私とあの人はお互いに黙ったまま。

いったい何考えてるの？

大学なんてムリにきまってるじゃない。

そんなお金あるわけないし、国公立なんて私にはムリだし、行きたいと思わないし。

チラッと横目であの人を見ると、前を向いたまま何か考えてる顔をしていた。

晩ごはんは、あの人が作ったカレーライス。

お肉の代わりにソーセージが入っている。

はじめて食べたとき、あの人が「貧乏人カレー」って言って笑ってた。

「真理子」

顔を上げると、あの人がまじめな顔で私を見ていた。

「おまえの夢ってなんだ？」

「夢？」

「あれだぞ、寝たときに見る夢じゃねえぞ、ほれ、何になりてえとかよ、そういう夢だよ」

「それは…」

夢なんて言葉... 忘れてた... 将来の夢... 何になりたいか...

パパが生きていた頃は... 留学して、英語を勉強して、それから...

留学から帰ったら翻訳の仕事をしたいな...とか。

でも、それで生計を立てるとか、そんなふうに思ったことはなかった。

だって、うちの親戚の女の人たちはみんな医者や会社の社長の奥さんになってて、働いてる人なんて誰もいなくて、だからなんとなく、私もいつか誰かと結婚して...

「お嫁...さん...」

「あ？」

「誰かのお嫁さんになるんだろうなあって...」

「それが、おまへの夢か？」

「夢...っていうか、そうなるのかなあって」

あの人がポカンとした顔で私を見て、そして、ブツと吹き出した。

「な、なんで笑うんですか？」

「だってよ、なんか小せえ女の子の夢みてえだよ、可愛いなあと思ってよ」

あの方はそう言いながらニヤニヤ笑ってた。

「だ、だって、私の親戚の女の方はみんなそうで、働いたりとかしてる人なんかなくて、だから私も、そうなるのかなあって、それだけですっ」

「そっかあ、真理子の夢はお嫁さんかあ」

「だ、だから、夢とかそういうんじゃないって...」

「でもなあ、あんまし早く嫁に行っちまったら、にいちゃん淋しくなるなあ」

「いきません！ ていうより、いけないと思うし」

「なんでだよ？」

「私、何もできないし、お料理とかそういうのできないから」

「んなことできなくたって関係ねえって」

「それは... お手伝いさんとかいる家ならそうだけど...」

「やっぱ、あれか？ 金持ちと結婚してえか？」

「べつに、そんなの、なんにも考えてないし、結婚なんて、まだぜんぜん考えられないし」

「まあな、進路志望に、お嫁さんになりてえなんて書けねえしな」

あの方はそう言って笑った。

「私は就職志望ですっ」

「真理子」

あの人が急に真顔になった。

「んっとにいいのか？」

「え？」

「大学行きてえんならよ、にいちゃんもっと仕事がんばって稼ぐからよ、
体力だけはあっからよ、夜だって土方とかすりゃ、金はなんとかかなんだからよ」
「なんで急に大学大学って言うの？ 私は就職するって言ってるのに」

あの人は私をチラッと見て、煙草を出して火をつけた。

「やっぱよ、おまえにはまともな生活してほしいっつかよ」

「まとも？」

「俺はもう生まれたときから貧乏ん中にいたからよ、これがまあ俺に合ってる暮らしだけだよ、
おまえは頭もいいしよ、大学行ってまともな職について、まともな人生歩けるんだからよ」

あの人はそこまで言うのとフーッと煙草の煙を吐いて...

「そんなためには、にいちゃん、できることはやってやりてえんだよ、
ずっとこんな貧乏暮らしさせんのは、かわいそうだもんなあ」
そう言って苦笑いした。

私は...

「うそつき」

あの人がポカンとした顔で見てるけど...

「ずっと一緒に暮らすって言ったくせに」

私はプイッと横向いて...

「それは... 言っただよ、でもよ、ほんとは留学までするつもりだったのによ」
「そんな、私の、大学のお金作る気があるなら、そんな、そんなお金あるなら」

私は上目遣いであの人をチラッと睨んで...

「お風呂とトイレ付きの部屋を借りた方がずっとずっと嬉しい」

「あ？」

「あと、洗濯機も」

あの人はポカーンと私を見ていた。

「私は大学行ったらやりたいことなんてないし、それより就職してお給料もらって、お風呂とトイレ付きの部屋に引っ越して、洗濯も部屋の中でできて、そこでおにちゃんと暮すことが今の私の夢なんです！」

フンって顔して立ち上がって、空のお皿を持って流しに行った。

「真理子」

「なんですかっ？」

私はお皿を洗いながら、つっけんどんに返事した。

「おまえの夢、ぜってえ叶えてやるよ」

あの人は... にっこり笑ってた。

「風呂と便所付いてる部屋だろ？ あ、洗濯機もか。」

おっし、にいちやんががんばって働いて、ぜってえそういう部屋に住めるようにしてやっからよ」

私は...

「おにいちやん！」

嬉しくて、洗剤のついたままの手であの人に抱きついた。

「わっ、冷てっ！」

「だって、お湯が出ないんだもの」

「そっか、わ～かった！ 湯沸かしもついてるとこだな」

「うん！」

「ぜってえ叶えてやっからな、待ってろよ」

あの人はそう言って、私をギュッと抱きしめた。

事故

いつもどおり退屈な物理の授業。

先生の話聞いてるふりして、私の頭の中は就職のことでいっぱい。

私はどんな仕事をしたいんだろう？

ううん、それより、どんな仕事ならできるのかな？

ウェートレス？

お盆ひっくり返しそう。

それに、いっぱい注文されたら憶えられないかも。

スーパーのレジ？

でも、よく見るのは『パート募集』で正社員ってないよね。

英語は得意だから、英語を使う仕事のある会社で雇ってくれないかな？

でも、そういう会社なら高卒より大卒を取るわよね。

進路指導室で見た求人要綱も、簿記の資格とかパソコン検定何級とか、資格がないとダメなものばかりだったし。

こんなことなら、商業高校に入ればよかったなあ。

でも、受験のときは、こんなことになるとは思ってなかったんだもの。

ガラッと教室の前の戸が開いて、担任が物理の先生を手招きした。

ドコカデ見タコトガアル... コノ光景... ドコカデ...

「香山」

担任の先生が私の名前を呼んだ。

わけもわからず身体が震える...

私はおそろおそろ机の間を縫って担任のところに行った。

「おにいさんが事故に遭われたそうだ」

オ父サンガ事故ニ遭ワレタソウダ... 事故ニ...

「急いで帰りなさい」

ウソ... こんな... ウソ... なんで同じことが起こるの... ウソよ... ウソ...

目の前が白くなって... そして...

目を開けると... 見たことのある顔... 誰？

「真理子ちゃん、気がついたか」

これは... この人は... あ... あの人の工場の社長...

「真理子ちゃんの担任の先生から電話があっけな、迎えにきたんだよ」

ここは... 保健室... 私... なぜここに...

「香山さん、起きれる？」

保健室の先生が私の顔を覗き込んだ。

「は... はい...」

ゆっくりと身体を起こして...

「真理子ちゃん、病院に連れてくからな」

「え？」

「ノブが運ばれた病院だよ」

「あ... ああ... あの、あの、お、おにい、おにいちゃん、おにいちゃんは...」

「大丈夫、生きてるから、安心しな」

「あ...」

生きてる... 生きてる... おにいちゃん... 生きてる... よかった...

急に涙がボロボロ出てきた。

「詳しい話は車中ですから、どうだ、もう立てるか？」

「は...はい」

ベッドから立ち上がって、社長と一緒に保健室を出た。

「得意先から急ぎの注文があつてな、ちょうど俺は商談の最中だったもので、
ノブに届けてもらったんだよ」

社長が運転しながら話をしている。

「ダンプが突っ込んできやがったんだとさ、しかも居眠り運転だと、ったくよ！」

パパのときと同じ...

「おにいちゃん...大丈夫なんですよ...生きてるんですよ...」

「ああ、生きてるから、心配しなくていいよ」

よかった... よかった... 生きてる...

早く会いたい... 早くあの人の顔を見たい... 早く... 早く...

ドアに『ICU』と書かれたガラス張りの部屋。

窓には薄いカーテンが引かれて中が見えない。

「あ、看護婦さん、こん中にいる中原伸男の妹なんだけど、入ってもいいかね？」

社長がちょうど部屋から出てきた看護婦さんに聞いた。

「いいですよ、でも、あまり長い時間はダメですよ、患者さんが疲れますから」

また貧血が起きそう... 怖くて...

社長と一緒に中に入った。

ベッドの上に... 頭に包帯を巻いて、鼻にチューブを入れられたあの人が...

両手も包帯が巻かれて、その間に点滴の針が刺さっている...

お腹から足にかけてテーブルのような形のものが毛布の中に入れていて...

うそ... やだ... 今朝はふつうに...

「ノブ、真理子ちゃんがきたぞ！　わかるか？」
社長の声に、あの人のまぶたがピクピクして...　重たそうに目を開けた。

「ま...り...こ...」

あの人はかすれた声で私の名前を呼んだ。

ボ〜ッと立っている私を「真理子ちゃん、ほら、ここに座んな」と社長が椅子に座らせた。

「まり...こ...」

あの人の目が私を探して...　そして...　焦点が合ったように私を見た。

「お...　おにいちゃん...」
「し...しん...ぱい...すんな...」
「な...」
私は...
「なに...」
もう...　なんだか...
「何言ってるの...　何言ってるの！　心配するでしょ！」
大声で泣きたくなくて...
「おにいちゃんの...　バカーー！」

包帯から出てるあの人の指をつかんで...　温かくて...
パパのときみたいに冷たくはなくて...

よかった...　生きてる...　よかった...　生きてて...

先生の目の前のレントゲン写真。

これは、あの人の？　そうよね...

「これは中原さんの左脛部の骨の写真です」

「ひだりけいぶってのはなんですかね？」

社長が聞いた。

「左脚のひざから下の骨ですね」

「ああ」

「ご覧のとおり、かなり損傷が激しく、筋肉組織および神経組織も潰れてしまっています」

先生は指でグルグルとレントゲンの上をなぞってみせた。

「早急に手術しないと壊疽が進行してしまうんですよ」

「えそつつうのはなんですか？」

「腐っていくんです」

「あ...りやりやりや...そりや...」

「今から左ひざから下を切断したいと思いますが、よろしいですか？」

「えっ!？」

社長が目をむいて驚いていた。

私は...

あの人が助かればいい、どんなことをしても生きていてくれればいい。

「あのお、脚切っちゃったら、歩けなくなるんですかね？」

「それはリハビリをして、義足をつけることができます」

「はあ、そうですかあ」

「それでは、今から手術を行いますので」

先生はそう言って立ち上がった。

あの人の左脚がなくなる。

だけど...

死んでしまうよりいい、生きていてほしい、どんなことをしても。

役に立ちたい

手術から一週間が経って、先生が経過は順調だと言っていた。

意識が戻って、先生から左脚を切断したことを告げられたあの人は、

「そうスカ」

ポツリとそう言っただけだった。

きっと本当はすごくショックで、すごく辛くて...

でも、あの人は、

「真理子がいんのによ、死んでらんねえもんな、足一本ですんだと思わねえとな」

包帯を巻かれている手で私の手をにぎった。

そんなこと言われたら私...

「真理子、なんで泣くんだよ、俺死んでねえって、ほら、生きてんだろ」って苦笑いされた。

手術直後はいろんな管がつながれていたけど、今は点滴の管だけ。

管が一本一本外されていくたび、私はホッとした。

それだけ、あの人が回復しているってことだから。

私は毎日病院に通っている。

朝から消灯まで。

病院の中のコインランドリーで洗濯したり、寝ているあの人のそばで本を読んだり...

あの人の寝息を聞いているだけでホッとする。

「真理子、おまえ、学校はどうした？」

「休んです」

「俺はもう大丈夫だから明日からでも行けよ」

「いいんです」

「よくねえだろ」

「おにいちゃんは私のこと心配しないで、早くよくなって」

「なるけどよ、学校はちゃんと行けよ」

「邪魔？」

「あ？」

「私は... いない方がいいですか？」

「んなこと言ってねえだろ」

「私は... 何もできないから...」

「真理子、なんだよ、どうした？」

昨日、社長が私に言った。

あの人の場合、自己を起した相手側が入院費用を負担するし労災になるから保険もおりるって。

その他の費用は社長がなんとかするから心配するなって。

でも...

私は... 何もできない...

パパが死んだときだって... どうすることもできなくて...

あの人に助けてもらって...

それなのに私は今あの人のために何もできない...

「私って... 役立たず...ですね」

「なんだよそれ」

あの人が笑った。

「くだらねえこと考えんな、バ〜カ」

「く、くだらないって...」

「おまえがいるから、がんばれんだよ」

「え？」

「やっぱよ、脚一本なくなったって聞いたときは、なんつうか...」

あの人が微かに顔を歪ませた。

「でもよ、おまえが... 生きててよかったって... 泣いてんの見たら...

俺はこいつのために生きなきゃなんねえって思ってよ、

だから、なんつうか、おまえがいるから...」

あの人がチラッと私の顔を見て...

「こんなところにいつまでも寝てらんねえよな、ハハハ」

私は... あの人の胸元に顔をうずめて...

あの人の手が私の頭を優しくなでた。

あの人の手の温かさと... その温かさに守られてばかりの自分を感じていた。

少しずつリハビリが始まった。

脚が一本ないというのは、あたりまえにできることもできないんだと知った。

最初はベッドに座ることも、うまくバランスがとれなくて大変だった。

初めて車椅子に座るときも何度も転んで、それでもあの人は必死に起き上がった。

車椅子に乗れるようになると、天気の良い日は病院の庭に出た。

「はあ〜、気持ちいいなあ」

あの人はそう言って本当に気持ちよさそうに伸びをした。

「早く退院してえなあ」

「松葉杖が使えるようになったら退院できるから、もう少しかな」

「そんでその次は義足つけて歩く練習だろ、クッソー、長げえなあ」

ひとつひとつ少しずつリハビリしながら慣れていかなければならない。

何も考えずにあたりまえに歩いていたけど、足が一本ないとそれがあたりまえじゃない。

「真理子、おまえ生活費はどうしてる？」

「え... う、うん、大丈夫」

「俺の通帳ががタンスん中に入ってたからよ、少しっきゃねえけど下ろして使えよ」

「うん」

私は...

あの人のところに引っ越すときに入りきらずに工場の倉庫に預けていた物を全部売った。

一流ブランドの靴やバッグや服、一回も使わなかったものがたくさんあったけど、

それでも、10万ちょっとにしかならなかった。

働きたい。

今すぐにでも学校をやめて、どこでもいいから働きたい。

あの人はいつ仕事に復帰できるかわからない、復帰できるのかどうかもわからない。

社長は、「ノブのことは面倒みるから心配しなくていいよ」と言ってくれたけど...

あの人が働けなかったとしたら、私が働かなくちゃ。

でも、私にできることがあるのだろうか... どこか雇ってくれるところがあるのだろうか...

仕事、探そう。

なんでもいい、なんでもしよう、なんでも....。

求人情報誌を買ってきたけど、18才の高校生を雇ってくれるところなんてない。
せいぜいファミレスやファーストフードのバイトだけど、時給は安いし、時間帯が合わない。
高校... やめようかな...
やめたってかまわない、どうせ進学するつもりはないし、できないし...
それより、今仕事が欲しい。
あっ、時給1,000円だって、高い！

『スナック花梨』

スナック... 未成年じゃ雇ってくれないよね...
それに、お酒を飲んで男の人の相手をするなんて私にできない...
でも...

「それで、あんた、何歳？」
お店のママが煙草をくわえながら聞いた。
「は、二十歳です」
ママがフーッと煙草の煙を吐いて笑った。
「ウソつかないの、どうみても17、8ってとこだよ」
ママはカウンターの裏にまわって、グラスにコーラをそそいで私の前に出した。
「おごり、これ飲んで帰りな」
「で、でも、あの、お、お金、お金が必要なんです」
「な～に？ 遊ぶ金？」
ママはそう言って鼻でフフンと笑った。
「ち、ちがいます！ あ、兄が事故に遭って、それで、まだ働けなくて、生活費が...」
バカみたい... こんなところでこんなこと訴えてどうなるっていうの...
「すみません、帰ります」
私は椅子から立ちあがった。
「ちょっと、それって作り話じゃないだろうね」
「本当です」
「ふうん」

ママはジッと私の顔を見て...

「雇ってやるよ」

「え？」

「ただし、あんたは20才だからね」

「は... はい」

雇ってもらったのに、急に不安になった。

でも、これしかできない、これしか...

あの人の病室のドアの前。

楽しそうな話し声が聞こえる。

病室のいちばん奥にあの人のベッドがある。

6人部屋で、みんなそれぞれ事故や病気で手や脚を切断した人たちがいる。

なんとなく仲間意識みたいなものができて、おしゃべりしたり、お見舞いの食べ物を分け合ったりして和気あいあいとしている。

スナックに勤めるなんて、絶対に言えない。

ふつうの顔して中に入らなきゃ。

ドアを開けると、手前側のベッドの人たちが集まっておしゃべりしていた。

あの人は... え？

あの人のベッドのところに誰がいる。

女の人... 誰？ お見舞いの人？

ゆっくりとベッドに近づくと、

「おう、真理子」

あの人が私に気づいて、そして、女の人が振り向いた。

「真理子ちゃん！」

え？

「綾子よ、綾子おばちゃま、あなたのお父さまの従妹よ」

「あっ... おばさま！」

「まあ、何年ぶりかしらあ、英彦さんの結婚式以来だから... 5年ぶり？」

「は、はい」

「まあ、すっかりおとなっぽくなっちゃって」

「お、おばさま... どうしてここへ...」

「それがね、ほら、私とジョッシュはカナダに住んでるでしょ？ 英彦さんが亡くなったとき、カナダに連絡をいただいたらしいんだけど、ちょうど二人でフランスに行ってたのよ、それでつい最近カナダに戻って... まさか、英彦さんが... ねえ」

おばさまはそう言って目をうるませた。

「英彦さんには小さい頃よく可愛がってもらったの、ほら、英彦さんは一人っ子でしょ？」

だから妹みたいにそれは優しくしてもらって…」

「あ…の… それで、どうしてここが？」

「それが大変だったのよ、英彦さんの弁護士に連絡を取ったら、この方のところにいるって、ところが、使いを出したら、その住所にはずっと帰ってきてないっていうでしょ、いろいろと手をまわして調べたら、ここに入院なさってるっていうから来たのよ」

「そう…ですか」

「え〜っと、中野さんでしたっけ？」

「いや、中原っス」

「あらあ、ごめんなさい、美里さんの再婚相手の息子さんですわよね」

「はい」

「真理子が本当にお世話になりました」

「いや、んなことないっスよ、今は俺の方が世話してもらってますから、なあ、真理子」

「そ、そんなことないけど」

「真理子ちゃん、私もちょうど今来たばかりなの、ちょっと下の喫茶でお話しましょう」

「え？」

私は思わずあの人の顔を見た。

「行ってこいよ」

「う、うん」

「それじゃ、中野さん、また来ますわね、お大事に」

おばさまはそう言って、私を連れて部屋を出た。

「真理子ちゃんにはかわいそうな目にあわせてしまったわねえ」

綾子おばさまはコーヒーにクリームを入れながら言った。

「早く知っていたら、すぐにでもうちに引き取ったのに、辛かったでしょ？」

「え… いえ、そんな…」

「ねえ、うちにいらっしやい」

「え？」

「カナダはいいわよお、風景も綺麗だし、真理子ちゃんきっと気に入ると思うの」

「でも…」

「ほら、私もジョッシュも子どもがいないでしょ、だから真理子ちゃんの話をしたら、ジョッシュったら、養女にしようって！」

「え？」

「私も英彦さんの娘のあなたなら引き取ってもいいと思ってるの。

従兄弟の中でいちばん尊敬していちばん仲がよくて好きなおにいさまだったんだもの」
「でも...」

「うちの近くにね、とってもいい高校があるのよ、名門のお家の子どもたちばかりなの。
そこには付属の大学もあるから、うちから通えるのよ」

「お... おばさま、お気持ちは... ありがたいんですけど... 私は...」

「いいのよ、言わなくてもわかるわ、義理があるものねえ」

「え？」

「あの方、ええと、中野さんには」

「中原です」

「あの方にはちゃんとお礼をするつもりよ。

真理子ちゃんは心配しなくていいのよ、ちゃんとおばちゃまが手配するからね」

「ち、ちがうんです、あの...」

「あら！ こんな時間！ ジョッシュの取引先のご夫婦とお食事の約束があるのよ」
おばさまは席を立て、

「あ、そうそう、私とジョッシュはホテル・ドルトンに泊まっているから、

いつでも連絡してちょうだいね、それじゃまたね」

そう言ってサッと伝票を持ってレジへと歩いていった。

私は...

頭の中でいろんなことがグルグルまわって、しばらくボーッと座っていた。

スナック花梨は、ママさん一人で切り盛りしている小さな店。

お客さまも近所の常連のおじさんが多い。

私は7時に店に入って、トイレ掃除や店の中の掃除をして、

店が始まると、汚れたグラスを洗ったり、おつまみを運んだりの雑用が多かった。

「ママ～、この子、新しい子かい？」

「そうよ、さくらちゃんっていうの、よろしくねえ」

私の名前は「さくら」って、ママさんが決めた。

「いいねえ、若い子がいるとさあ、ママだけじゃバケモノ屋敷みたいだったもんなあ、ハハハ」
「あ〜っそ、そんなこというと、今度からツケはきかないよ」
「あ、うそだよお、ママは美人！チョー——美人！」
「とってつけたように言わなくていいよ」

私はママさんとお客さまのやり取りをボーッと聞いていただけ。
お客さまにつくときは、ウーロン茶を飲んでいるけど、それでもたまに、
「さくらちゃん、ほらほら、飲んで飲んで」って、無理やり飲まされたりする。
苦しくって、気持ち悪くて、あとでトイレに駆け込んでゲーゲー吐いてしまう。
「これが水商売だよ」
ママはそう言いながらも胃薬をくれる。

一時に店を閉めて、後片付けしてアパートへ帰る。
店からアパートまでバス停3つ。
帰りはバスはないから、歩いて帰る。
アパートに着くと、すぐに布団を敷いてボタンと寝てしまう。
気がつくと、布団も敷かずに畳の上に寝ていたこともあった。

それでも7時には起きて病院へ行った。

私が病室に入ると、あの人は「おう」と嬉しそうにニッコリ笑う。

「真理子、グッドニュースがあんぞ」
「なあに？」
「先生がよ、あさってには退院していいってよ」
「ほんと？」
「ああ」
「よかったあ」
「やっとシャバに戻れんなあ」
「おにいちゃんたら、刑務所に入ってるわけじゃないんだから」
「やっぱよ、な〜んもしねえで寝てんのは性に合わねえんだな、貧乏性つつうかよ」
あの人はそう言って笑った。
「早く仕事してえなあ、身体なまっちゃったよ」
「まだまだでしょ、退院しても一カ月はリハビリに通って、その後義足つけるための入院で…」
「看護婦みてえなこと言うなよお」
あの人はそう言って苦笑いした。

「真理子には心配かけちゃったなあ」

「そんなこと...」

「俺がおまえのこと世話しなきゃなんねえのによ、逆に世話んなっちまったなあ」

そんな...こと...ない... 私はまだ何もできてない...

「俺、がんばって働いてよ、ぜってえおまえの夢かなえてやっからな」

「え？」

「風呂と便所付きの部屋だろ」

あの人はそう言って笑った。

でも...

また前のように仕事ができるようになるのかわからない。

機械油と汗にまみれるようなきつい仕事を片足でできるのかわからない。

それに... 私は... あの人の...

とうとう退院の日になった。

あの人は病院から支給されていた寝巻きを脱いで、Ｔシャツとジーパンに着替えた。

ジーパンを履くときが一苦勞で、今まであたりまえにやっていたことがあたりまえにはできないんだって、そう思っている、

「心配すんなって、そのうち慣れっから」

あの人はそう言って笑った。

アパートの部屋が一階でよかった。

松葉杖で階段を上り下りするのは大変なもの。

部屋の中に入ると、あの人は畳に大の字になって、

「ああ、や～っぱ家はいいなあ」って言った。

「ボロでもよ、やっぱ自分ン家つつうのはホッとすんなあ」

「お布団敷こうか？」

「もう病人じゃねえんだから寝てばっかいたくねえよ」

あの人はそう言って笑った。

「それによ、なんでも自分でやれるようになんねえとよ。

リハビリの先生にも言われたしな、脚がねえからできないなんて思うのは、
ただの思い込みなんだよってよ、脚が一本ねえくらいどってことねえよ」
そう言って、あの人は手を広げた。

「真理子、来い」

「なあに？」

そばに行くと、

「ほれ、俺の股の間に座れ」

そう言って、私を座らせて腕をまわした。

「ほらな、ちゃんとおまえのことも抱っこしてやれるんだぞ」

私はあの人の胸に顔をうずめた。

これからどうなるかわからない... この人が前のように働けるのか...

でも、一緒にいたいから... ずっといたいから... だから...

「おにいちゃん、今日は退院祝いに夕食はステーキだからね！」

「マジ？」

「スーパーの安売りのだけどね、お肉焼くくらいなら私にもできるから」

「真理子、おまえ、生活費はどうしてた？」

「え？ ん... 大丈夫...」

「俺の通帳からちゃんとおろして使ったか？」

「え... あ...」

言わなきゃ... 働いてるって... でも...

「あ... あのね、私、バイト始めたの」

「バイト？」

「うん、あの、夜だけだから、昼間はおにいちゃんの世話ができるし...」

「夜だけって、どんなバイトだ？」

あの人が怪訝そうな顔をして聞いた。

「え... あの... ス... コ、コンビニ、コンビニの店員」

「夜にか？ ふつう夜は男しか雇わねえぞ」

「あ... あの... と、友だちの家なの、友だちのお父さんが経営してて、人手が足りなくて、
夜っていても私一人じゃないから、だから、大丈夫」

あの人はジッと私の顔を見て...

「そんなに金に困ってんのか？」

「ち、ちがうわよ、ほ、ほら、夜一人でここにいるのつまんなかったし、それに、ほら、

私、働いたことなかったから、いい社会勉強っていうか、それだけだから」
「真理子、ほんとのこと言えよ」
「ほんとだってば」

私は顔を見られないように冷蔵庫を開けて...

「ほら、二枚で980円！ 安いでしょ！」
そう言ってパックに入ったステーキ用の肉を見せた。
あの人はチラッとだけそれを見ると、また私の顔を見て...

「真理子」
「な、なあに？」
「バイトもいいけどよ、そろそろ学校に行けよ」
「え... う、うん...」
「俺のことは心配すんな、おまえはちゃんと学校行って高校卒業しろよな」
「うん...」

学校には... 休学届けを出していた。
本当は退学届けを出したんだけど、担任の先生が、
「とにかく休学にしておいて、様子を見たっていいんじゃないのか」って言ったから。

私... あの人にうそばかりついる...
それが苦しい... だけど... 他にどうしたらいいのかわからないだもの...

あの人が退院してから、昼はリハビリの付き添いをして、夜はバイトに出かけた。

バイトから帰ってくると、あの人は目を覚まして、「おかえり」って言ってくれる。
それだけで疲れが癒される気がして、私はあの人のとなりの布団でぐっすりと眠る。

今日は初めてきたお客さんがイヤな人で、身体に触ってきたり無理やりお酒を飲まされた。
ママが止めてくれたからよかったけど、すごく... すごくイヤな気分。

パジャマに着替えて、お布団に入ると、
「真理子、こっち来い」
あの人が自分の布団をめくってそう言った。

そんなこと初めてで... だけど... 今日は... なんとなく甘えたくて...

私はあの人の横に身体を滑り込ませた。
あの人が私をそっと抱きしめた。
「真理子...」
「なあに？」
「なんでもねえ...」
あの人は私を抱きしめたまま、目を閉じた。

あったかい... この人の腕の中... 私は... ずっとここにいたい... この人の腕の中に...

あの人の心臓の鼓動が聞こえる... 生きてる証...
ずっと聞いていたい... この人の鼓動をずっと...

いつの間に... こんなに大切な人になったんだろう...
一緒にいればいるほど、もっと一緒にいたくなる...
兄妹ってそうなの？ 私とこの人はほんとの兄妹みたいになったってこと？

この人に抱っこされているとホッとするのに、ドキドキするのはなぜ？

わからない...

だけど... ずっとこうしていたことだけは確かなことで...

この人の腕の中はフワッと暖かい...

いつのまにかイヤなことなんかすっかり忘れて、私はあの人の腕の中で眠りについた。

次の日、いつものように花梨で働いていると、

「さくらちゃん、お客さんが来てるよ」

ママに言われて入り口に行ってみると、知らない男の人が立っていた。

「香山真理子さんですね」

「え... は、はい」

「綾子さまの使いでまいりました」

「え？」

「すぐにホテルまでいらしていただきたいそうです」

「で、でも、私、まだ工作中で...」

「経営者の方には私から事情をお話しましたので、車にお乗りください」

その人はそう言って、店の前に止めていたベンツのドアを開けた。

私は... 後部座席に座りながら...

どうして綾子おばさまが知ったんだろう... あそこで私が働いているって... どうして...

高級ホテルドルトンのスイートルームのドアの前。

「奥様、真理子さまをお連れしました」

使いの人がそう言ってドアを開けた。

えっ...

綾子おばさまの向かいに、あの人が座っていた。

どうして？ どういうこと？ 何があったの？

「真理子ちゃん、ここにお座りなさい」

綾子おばさまが厳しい顔つきで自分が座っているソファの横に手を置いた。

私は言われるままに、おばさまの横に座って...

「真理子ちゃん、これはどういうことかしら？」

おばさまはそう言ってテーブルの上の写真を広げて見せた。

あっ...

花梨で働いてる私... どうして... いつ... いったい誰が撮ったの？

「真理子ちゃん、スナックなんかで働いていたのね？」

私は... 何も言えなくて... だって... もう証拠がここにある...

上目遣いであの人を見ると、何か考え込んでいるように自分の手を見つめていた。

ウソがバレてしまった... あの人に... すべて...

「真理子ちゃん、こうなったら絶対にあなたのことをカナダに連れて帰るわ」

「え？」

「香山家の人間が、こんな水商売なんかさせられて！」

綾子オバサマはそう言って写真を指でトントンと叩いた。

「させられてたんじゃないわ！ 私が勝手にやってたの！ おにいちゃんには知らなかったの！」

「ううん、私、ウソついて働いてたの！ 私が悪いの！」

「そんなことはどうでもいいのよ、こんな恥ずかしいことをしていたことが問題なの」

「は... 恥ずかしいこと...とは思わない、私、一生懸命働いていたの、

何もできなかったし、今も何もできないけど、でも一生懸命働いて...」

「そこよ！」

おばさまが私の肩をつかんだ。

「真理子ちゃん、どうしてあなたが働かなきゃならないの？ しかもスナックなんかで！」

「だから、それは...」

「あなたは由緒ある香山家の人間なのよ！ それが、こう言っては失礼ですけど」

おばさまは、横目であの人を見て...

「あんな汚いアパートに赤の他人の男性と一緒に住んで、スナックで働いてるなんて、

そんなホステスとヒモみたいな生活なんかさせられて！」

「ち、ちがう！ おにいちゃんは本当に知らなくて、私がウソをついて勝手に...」

「とにかく！ 真理子ちゃん、あなたは私とジョッシュが引き取るわ。

中野さんには... 私が来るまではお世話になったかもしれませんが、
美里さんの再婚相手の息子さんといえば、なんのつながりもない赤の他人、
真理子ちゃんのお父さまの従妹の私が引き取るのが筋でしょ？」

そう...だけど、それが筋なのかもしれないけど、でも、でも、私は...

「そういうことですので、中野さん、今まで真理子がお世話になりました。

後日あらためてお礼をさせていただきますけど、今日はこれで失礼しますわ」

綾子おばさまがあの人にそう言うと、あの方は松葉杖を使ってゆっくりと立ち上がった。

私は... あの方の顔を、すぐるように、あの方を見たけれど、

あの方は微かに悲しそうな目で私を見ると目をふせてドアに向かって歩き出した。

「吉田、中野さんを送ってさしあげてちょうだい」

さっき私を連れてきた男の人が、おばさまに一礼してからドアを開けた。

「いっすよ、一人で帰れますから」

かすれた声であの人が言った。

私は...

「おにいちゃん！」

一瞬、あの方が動きを止めた。

でも...

ふり返りらずにドアから出ていった。

火事

久しぶりのベッドはなんだか柔らかすぎて身体が痛い。

スーイルームの窓辺のドレープのカーテンは、以前の家のリビングのカーテンに似ていた。
何年も前のことじゃないのに、私はこの豪華さに違和感を感じてる。

違和感？ ううん、もっとちがう感覚...

私は綾子おばさまのところで、また前のような生活に戻るだけ...
パパが生きていた頃のようなあの日々に...
だけど...

もう二度と... あの人に会えない...

そう思うと、胸の奥に鉛のような重たいものを感じて...

ナニモ感じタクナイ... ナニモ...

もうあの人に会えない... もう二度とあの人のあの暖かい腕の中に戻れない...

ちがう...

ちがう！

戻れないのは私、もう二度と戻れない、あの人と出会う前の私には...！

会いたい！ 会いに行こう！

拒絶されてもいい！ どんなに罵倒されてもいい！

あの人に会いに行こう！

私はそっとドアを開けて、綾子おばさまの部屋の灯が消えているのを確かめて、
真っ暗なリビングを抜けて、音を立てないようにドアチェーンを開けて、外に出た。

真夜中の街の中をタクシーが走る。

昨日までのバイト代を全部使ってしまうけど...

お金のことは、明日からのことはあとで考えればいい。

今はただ... あの人に会いたい！ 顔を見たい！

タクシーがどんどん狭くてゴチャゴチャした道へと入っていった。

もうすぐ... もうすぐあの人のアパートに着く...！

「あれえ？ お客さ〜ん、火事みたいだねえ」

「え？」

「ほら、あっちの方に煙が見えてるよ」

運転手さんの指さす方角は... まさか... でも...

「あ、あの、急いでください」

「行けるかどうかわかんないよ？ 消防車とか来てるみたいだからさあ」

「行けるところまででいいんです、お願い、急いで」

うそ... でも... 近い... あのアパートのあるあたりのすぐそばから煙が見える...

結局タクシーは路地の中まで入れなくて、私はタクシーを降りて走った。

路地を抜けると...

あのアパートのとなりの家が燃えていて、火がアパートに燃え移ろうとしていた。

あ、あの人は？ どこ？ 逃げた？

もうすでにいっぱい集まってきている野次馬たちの間をぬって、あの人の姿を探した。

いない... どこ？ お願い、どこかに逃げていて！

あっ！ 火がアパートに燃え移った！

も、もしも、あの中にまだあの人がいたら...
松葉杖のあの人が...

私は、あたりに張り巡らされたテープをくぐって、消防士さんのところに走った。
「おい！ ダメだよ！ 危ないから向こうに行きなさい！」
「あの中にいるんです！」
「え？」
「松葉杖で、脚が片方ないから、逃げられないのかもしれないんです！」
「男か女か？」
「お、男です、20代の、102号室です、お願い、助けてください！」
「ちょっと待ってなさい」

消防士さんはそう言うと言線で連絡を取り始めた。

「現場102号室に松葉杖の男性がいるそうです、搜索願います、どうぞ」
ジジーッとかキーンという音...
『現場102号室にて男性発見、救助しました』

あ... よかった...
私はヘナヘナとその場に座り込んだ。

あっ！ あの人が消防士さんに抱えられてアパートから出てきた！
よかった！

駆け寄ろうしたそのとき、
「あっ、おい！ ダメだよ！ 戻りなさい！」
あの人がまたアパートの中に片脚で跳ねながら入っていきこうとした。
消防士さんが二人がかりであの人を押さえつけた。

「放してくれ！ 取りにいきなきゃなんねえんだよ！」
あの方はもがきながら叫んでいた。
「毛布！ 毛布が中にあんだよ！」

毛布？

「ダメだ！ 火の回りが速い！ 毛布くらいあきらめなさい！」

「あいつの毛布なんだよ！ かあちゃんがあいつのために取っておいた毛布なんだよ！」

あの人は... ベビー毛布を... 私の本当のママの... 私が赤ちゃんのときの...

「あいつに渡してやんねえとよ！ あれっきゃ形見がねえんだよ！ 放せよ！」

私は... 私は...

あの人のそばに駆け寄って、

「おにいちゃん！」

あの人の胸にすがった。

「ま... 真理子... な、なんで...」

「毛布なんていい！ そんなものいらない！」

私はあの人のシャツの胸元をつかんで揺すった。

「憶えてないの！ ママに抱かれたことも、ベビー毛布にくるまれてた感覚も！

だけど、だけど、あなたが抱っこしてくれる暖かさは憶えてる！

あんな毛布はいらない！ 私はいらない！ あなたがいればいい！」

私は泣きながら叫ぶように言った。

「あなたがいればいい！ 私にはあなたが必要なの！」

あの人は驚いた顔で私を見ていた。

「危ないことしないで！ そばにいて！ 私のそばにいて！ お願い！」

「ま...」

あの人の腕が...

「真理子！」

私を強く強く抱きしめた。

アパートは全焼した。

まだプスプスと煙が出ている焼け跡を、私とあの人はボ〜ッと見ていた。

「真理子... おまえ、俺にウソついてたろ？」

「ご...めんなさい...」

「でもな... 俺は...」

あの人は、ぎこちない動きで地べたに座った。

「おまえが俺にウソつくもっと前から、おまえに... ウソついてた」

え？

「おまえのこと... 妹だと思ってたことなんてねえんだ」

ど...どういう...

「最初は、そりゃ最初は、やっとなと暮らせるって、思ってたけどよ、
でも、どうしても... おまえのこと妹と思えなくてよ」

だから？ 私を綾子おばさまのところに置いて行ってしまったの？

「ひでえよな、わかってるよ、でもよ、しかたねえんだよ」

そ...う... それで...

「そ...それは... しかたないと...思います... 血がつながってない... 他人...ですから」

「真理子」

「私の生みの母が... あなたのお父様と結婚しただけで... 私とあなたは他人ですから」

全身の力が抜けてしまいそうなのを必死に抑えて...

「あなたは私の生みの母との約束を守ってくださっただけで... だから...」

「惚れちゃったんだよ」

え...

「おまえのこと、惚れた女にしか見えねえんだよ」

なに...今...なんて...

「なのによ、アニキのふりして、妹だって思ってるふりしてよ、最低だよな」

頭の中がグルグルと... 何が... どういう意味...

「ど... どういうことですか？」

「俺がウソつきだってことだよ」

笑って言うけど...

「そ...そんなこと言われて... わ、私... どうしたらいいんですか？」

あの人は、困ったような...苦しいような目で私を見上げて... フッと笑った。

「好きにしていーぞ。殴っても蹴っても気い済むまでボコっていーよ」

「そんな...ことじゃなくて... なぜ、今そんなこと... 言ったんですか？」

「なんでかなあ」

あの人は頭をボリボリかいて...

「もう会えなくなるからだろうな」

だから？ だからなに？

「会えなくなるって、どういうことですか？」

「あのおばさんとカナダで暮らすんだろ」

「そうして欲しいんですか？」

「それは、だってよ、そういうことになったんだからよ」

「あなたは？ 私がカナダに行けばいいと思ってるんですか？」

あの人は... 私の顔をチラッと見て... ちょっとくちびるかんで... そして...

「それがいっちゃんいいだろ」

微笑んだ。

「誰にとって？ あなたにとって？」

「おまえにとってだろ」

「あなたにとっては？」

「それは…」

そのまま、あの人は黙り込んだ。

「私と... ずっと一緒にいるって... あれも... ウソ？」

あの人は黙ったままで...

「ねえ、あれもウソ？」

「あれは…」

低く暗い声...

「ウソじゃねえよ」

だったら...

「だったら、なんでカナダに行けなんて言うの？」

あの人は... 私を見上げて... 困ったような顔で微笑んだ。

「俺は、おまえのこと妹と思ってねえんだっつったろ？ そんな男と一緒に暮らせねえだろ」

私... 私だって...

「私だって、あなたのこと、おにいちゃんだと思ったことない！」

あの人が目を見開いて私の顔見てるけど...

「おにいちゃんてこんな風なのかなあと思ったことはあるけど、実感なんか持ったことない！

だけど、だけど一緒にいるとホッとして、しあわせで、だから、一緒にいたいって」

「真理子…」

「でも、もういいです！ あなたがカナダに行けっていうのならいきます！

今までお世話になりました！ ありがとうございます！ さようなら！」

私は... 走った。

「真理子！」

腹が立って、何に怒ってるのかわからないけど、

「真理子！」

だって、一緒に暮らせないとか、妹と思えないとか、そんなこと言われて

ドスンッ

大きな音に振り向くと、あの人が泥の中に倒れてる...！

「あっ、お、おにいちゃん！」

駆け寄った、反射的に。

「だ、大丈夫？」

あの人は泥だらけの顔をあげて

「なわけねえだろ」

困ったような顔して笑った。

「つ、つかまって」

私はあの人の身体を支えて、あの人がなんとか起きあがった。

「ったくよ、急に走ってくなよ」

「そ、そんなこと言ったって...」

「追っかけらんねえだろ」

追いかけてくれなくなたって... 追いかける必要なんて...

「な？ 俺はもうおまえのこと追っかけることもできねえんだよ」

あの人は失くした方の腿をさすって...

「こんなだもんなあ」

情けない貌して笑ってみせた。

「どうして...」

どうして...

「追いかけてようと...したの...」

あの人はチラッと私の顔を見て、そして、また情けなさそうな顔で笑った。

「だよなあ、バカだよな」

「どうして... 私を追いかけてようとしたの？」

あの人は私を黙って見つめて...

その目は優しく...辛そうで...苦しそうで... 何を考えているの？

「行くな」

えっ？

「とは言えねえんだよなあ、今の俺はよ」

ハ〜ッと息を吐いて、また笑った。

「こんななんちまってよ、家だってねえしよ、なんもねえもんな」

のんきな声で言うけど... 笑いながら言うけど...

「最初から... あなたは... 何もなかった」

私は...

「お風呂だってトイレだって洗濯機だって... ゴキブリは...いたけど」

「あ？ ああ！ アハハ！ だったな」

だけど...

「だけど... ひとつだけ...」

なんて...言ったらいいの...言っても...いいの？

「い、いつも... 私のこと... その腕で... その... 胸の中で...」

くちびるが震えてきて...

「私のこと抱きしめてくれた... 毛布みたいに... 私のこと...」

涙だけが出て... もう言葉が出なくて...

「真理子...」

あの人の顔も...涙で見えなくて...

「真理子...」

私の名前を呼ぶあの人の声が優しくて... 私は...

「返して！」

涙でにじんで見えるあの人の顔を...

「私の毛布を返して！ あなたの腕を、あなたの胸の中を、返してよ！」

私はあの人の胸の中に飛び込んだ。

あの人はとっさに私を抱きしめて、そのまま後ろに倒れた、泥の中に。

あの人が私の頭を優しくなでる... 私は... あの人の胸の中で泣いた...いっぱい...泣いた。
あの人の身体もかすかに震えてるのを感じながら...

包んであげる

あれから...

泣き止んで顔をあげると、私とあの人は泥だらけになっていた。

「真理子、おまえ、抱き着く場所考えろつつうの」

そう言って笑うあの人の目は真っ赤だった。

「よかったあ！」

あの人は嬉しそうに...

「失くしたのが脚だよ！ 腕だったら、真理子に一生恨まれちまってたな」
そんなこと言われると...

「また...泣きそう...」

「おう！ 泣け！ 腕はあるからな！」

「そんなこと言われたら... おかしくて泣けなくなっちゃう」

「どっちでもいいよ！」

あの人は私をギュウッと抱きしめた。

「行くな」

あの人の声を胸の中で聞いていた...

「ずっとここにいろ、ずっと」

私はあの人の胸の中でコクンとうなずいた。

「でねえと... おまえ、風邪ひいちゃうからな」

「風邪？」

顔をあげると、あの人はおどけた顔で私を見て、

「俺は、おまえの毛布なんだろ？」

私は... ちょっと照れくさくて...嬉しくて...

「うん」

微笑んだ。

あれから二年...

あの人は義足にもすっかり慣れて仕事に復帰している。
やっぱり油と汗にまみれて働いてるあの人は生き生きしている。

「お風呂に入る？」

「おう」

障害者用の助成で、お風呂とトイレ付の公団住宅に住めるようになった。

「なんだよなあ、真理子の夢叶えたのは俺じゃなくて俺の脚かよ」

あの人は笑ってたけど、本当はお風呂もトイレもなくても...

ダメダメ、過ぎたこと考えたって。

最初はお風呂に入るのを手伝ってたけど、あの人はすぐに一人で入れるようになった。

「こんなチョロいって」って言うけど、

私にできるだけ負担かけないように頑張ってることくらい私だってわかる。

私ができることなんて...

えっと...

少～しは料理ができるようにはなった。

お弁当だって毎朝作ってる。

焦げた卵焼きでも、「うまかった！」って、あの人は言ってくれるけど。

大変なことはいっぱいいっぱいある。

あの人は失った脚の痛みに襲われて眠れないときもある。

先生が、「幻肢痛」というものだとおしえてくれた。

私はさすってあげることしかできない。

「真理子にさすってもらえると楽になる」って、あの人は言ってくれるけど、さすったからって痛みがなくなるわけじゃないのは私もわかってる。

私は何もできない...

でも、あの人が苦しそうに顔をゆがめているとき...

ひとりぼっちでこんな苦しみに耐えてなくてよかったって思う。

何もできないけど、ひとりぼっちにだけはしなくてすむ。

だけど、私だって頑張ったことはある。

簿記の試験に合格したの、3級だけど。

もっと数学ちゃんとやっておけばよかったってメゲそうになったこともあったけど、あの人が頑張ってる姿を見てたら、こんなことでメゲちゃダメ！って頑張れた。

あの人のそばにいたいから。

社長が工場の事務として雇ってくれたから。

「簿記の資格なんていないよ、たいしたことやってないんだからさ」

社長の奥さんはそう言ったけど、やるならちゃんと仕事ができるようになりたいから。

でも...

三ヵ月くらいはお休みしないとだけ。

「イタッ！」

もう！ そんなに強く蹴らなくてもいいでしょ！

「また蹴ったんか」

「うん」

「早く出てきてえんだろうな」

あの人が私の大きなお腹をさする。

「あと二ヵ月かあ、お〜い、とうちゃんだぞ〜、早く出てこ〜い」

「早く出てきちゃダメでしょ」

「そっか」

あの人が私のお腹に頬をあてて...

「待ってるかな、ゆっくりでいいぞ〜」

あの人は私を見上げて、優しい目で... 微笑んだ。

安心してね。

あなたが生まれたら...

大きな温かい毛布で包んであげるから。

あの人と私で...

ふたりの腕とふたりの胸で...

FIN.